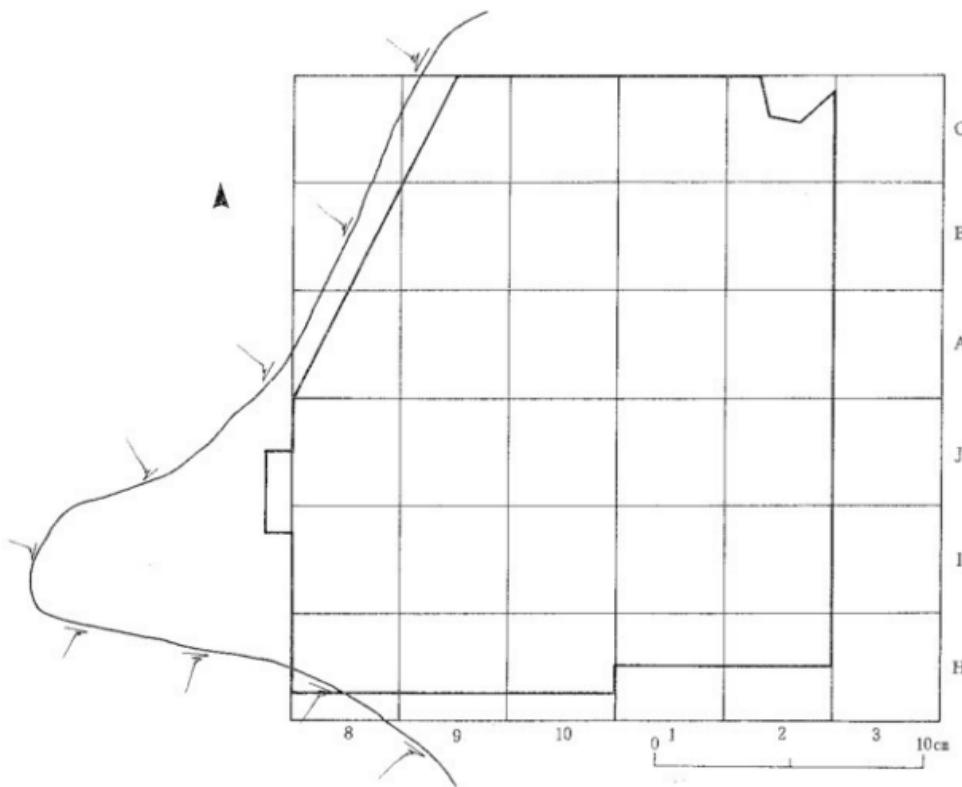


図版18 造構外出土土器



第2図 K区グリッド配置図

### 遺跡の概観

末戸松本集落から御所野に通る市道の中間地点に、北西に広がる標高34m程の台地がある。秋田営林署の旧苗畑があったところで、遺跡はここに位置する。

発見した遺構は、弥生時代の土塙である。遺物は、弥生式土器、平安時代の土師器甕、土鐘などが出土している。遺跡の南西の台地には、弥生時代の土塙、平安時代の墓地を検出した湯ノ沢F遺跡、縄文時代中期末葉の湯ノ沢H遺跡がある。

### 調査経過

北西に広がる台地の地形を考慮して、AからKまでの地区を設定し、範囲確認調査を兼ねてトレントによる調査を行った。その結果、K区を除いた他の地区には、遺構、遺物はほとんど認められなかった。そこでK区をグリッドによって拡張し、集中的に調査を実施した。結果、弥生時代の土塙19基を検出し、土塙内からは弥生式土器が若干出土した。

## 遺構と遺物

### 土塙（第3～5図）

19基の土塙を検出した。プランは、円形、梢円形を呈するもので、深さは平均すると76cmを計る。断面形は袋状、鍋底状をなすものが多い。詳細は表（表1）にしてまとめた。

### 出土遺物

#### 1号土塙出土遺物（第6図）

土器：1は口径15.3cm、器高6.6cmの蓋形土器である。中程から急に外反し、底部下端と、くびれ部に一条づつ沈線がまわる他は無文である。2は口径12.2cm、器高16cmの変形土器である。頸部に二条の沈線がまわる。地文はLRの單節斜繩文で、横、斜位回転である。

#### 11号土塙出土遺物（第6図）

土器：3は復元すると口径15.7cm、器高6.5cmの鉢形土器である。口縁部と体部下端に一条づつ沈線がまわる。間に2個1対の小突起を配し、変形工字文で連絡させている。ベンガラが塗布されていたと思われ、部分的に残存している。

#### 12号土塙出土遺物（第6図）

土器：4は底形5.9cm、現存高11.5cmの壺形土器と思われる。胴部の4ヶ所に小さな粘土瘤をつけ、三条の平行線がまわる。胴上部には二条の沈線を単位にし、弧状に配している。沈線間に繩文を残し、他は磨消している。地文はLRの單節斜繩文斜位回転である。

### B区トレント出土遺物（第7図）

B区トレント調査で土師器破片、小形土錐が出土した。

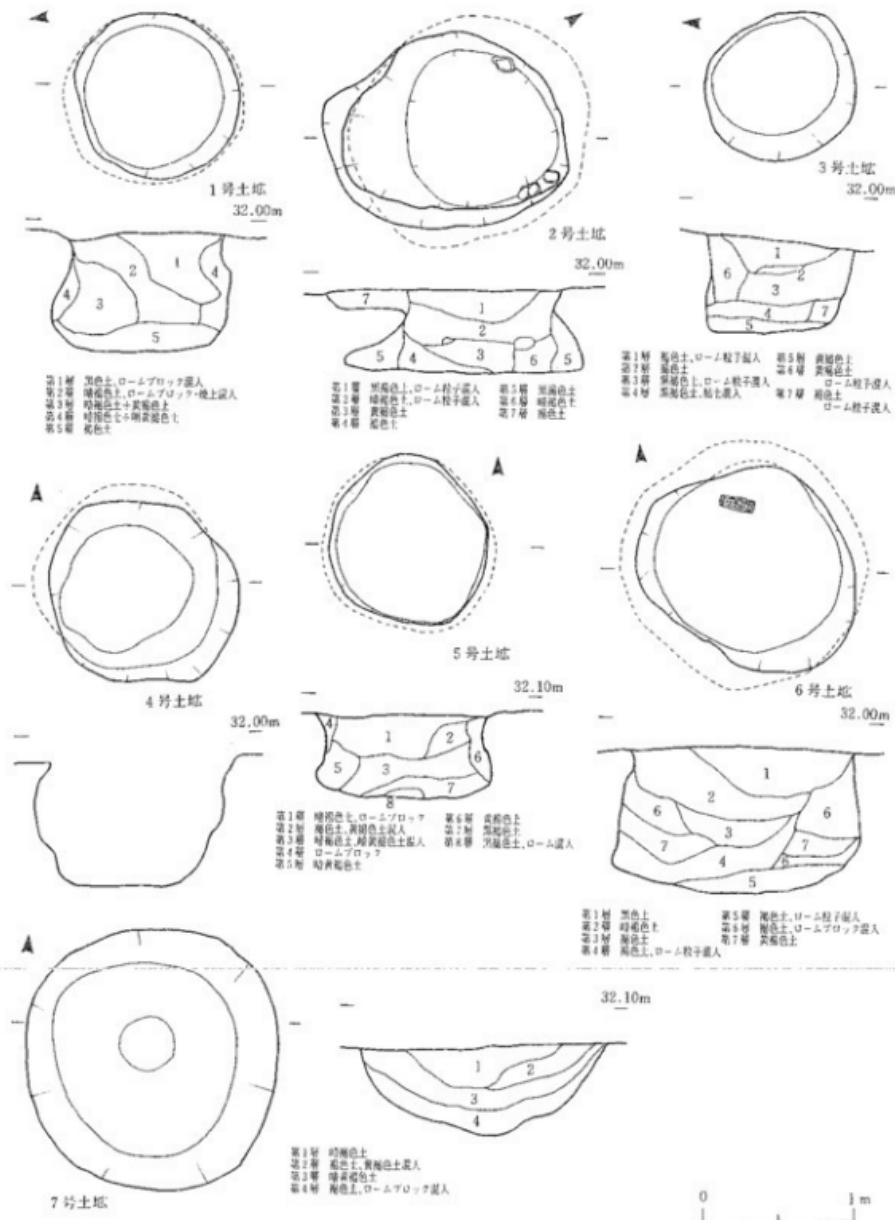
土器：1は土師器甕である。復元口径11.7cm、器高13.7cmを計る。頸部は「く」の字に外反し、口縁はまっすぐ立ち上がる。体部下方には手持ちのヘラケズリを施している。

土錐：2～68は小形の土錐である。長さ1.8～3.4cm、直径0.9～1.2cmの範囲に入るものである。

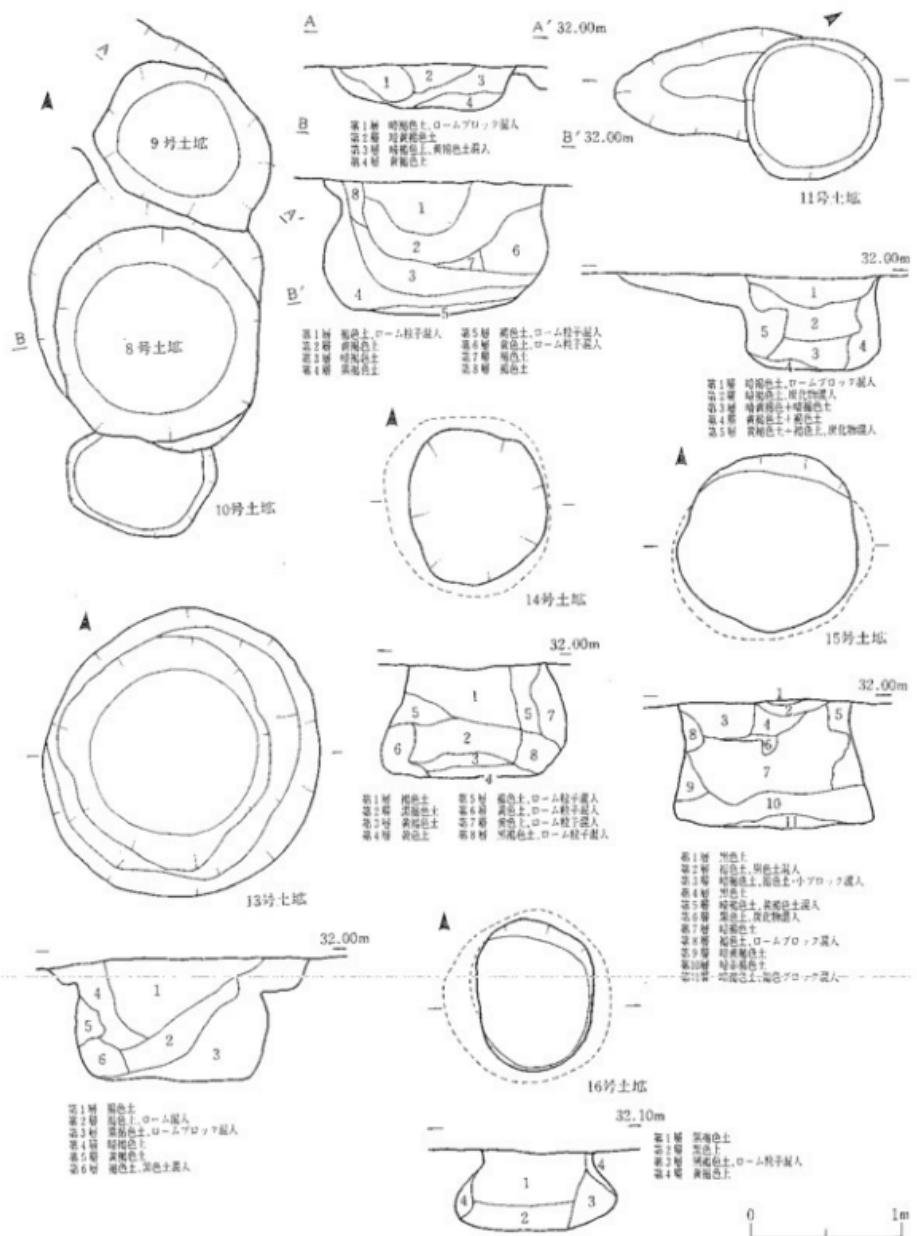
弥生時代土塙一覧表

(表1)

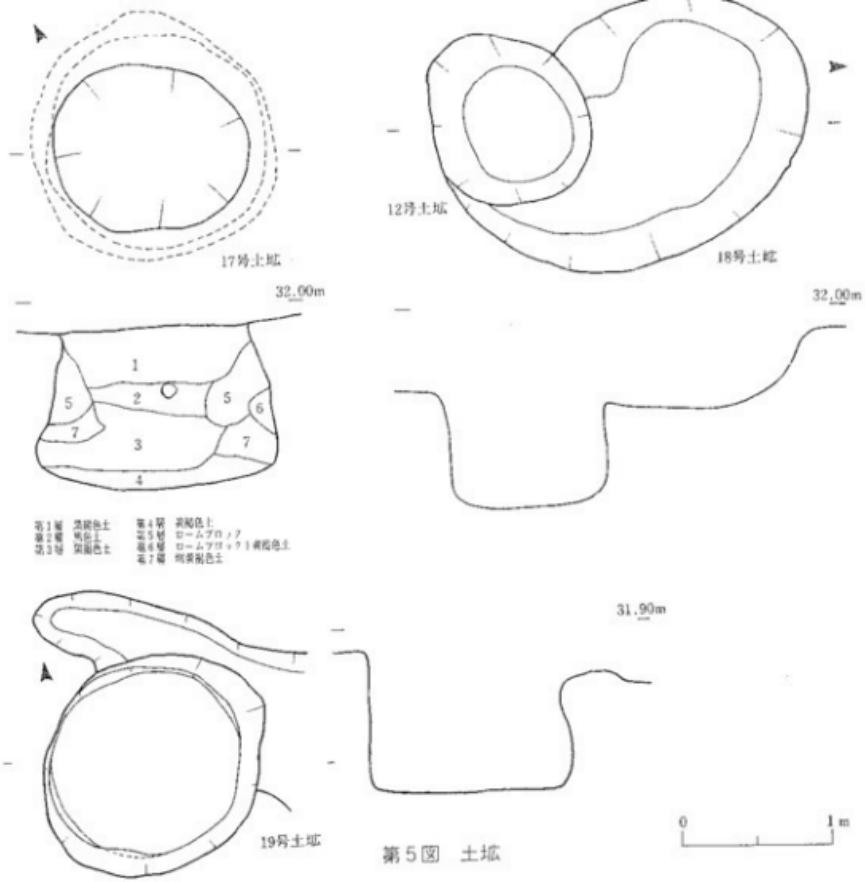
土塙番号	項目	規 模 (m)			平 面 形	断 面 形	出 土 遺 物
		長	幅	高			
1号		1.13	1.09	0.78	円 形	袋 状	第5図1・2
2号		1.6	1.31	0.55	梢 円 形	袋 状	
3号		1.07	0.94	0.65	円 形	モーガー状	
4号		1.34	1.21	0.84	円 形	袋 状	
5号		1.17	1.05	0.55	円 形	袋 状	
6号		1.54	1.25	0.98	梢 円 形	袋 状	
7号		1.74	1.67	0.59	円 形	輪 級 状	
8号		1.9	1.6	0.96	円 形	袋 状	
9号		1.16	0.94	0.29	梢 円 形	輪 級 状	
10号		1.6	0.68	0.2	梢 円 形	袋 状	
11号		0.93	0.9	0.6	円 形	ビーカー状	第6図3
12号		1.22	1.06	0.75	梢 円 形	ビーカー状	第6図4
13号		1.94	1.82	0.83	梢 円 形	袋 状	
14号		1.03	0.9	0.73	梢 円 形	袋 状	
15号		1.2	1.18	0.85	梢 円 形	袋 状	
16号		1.02	0.75	0.52	梢 円 形	袋 状	
17号		1.31	1.1	1.06	梢 円 形	袋 状	
18号		2.42	1.65	0.52	梢 円 形	輪 級 状	
19号		1.64	1.41	0.93	梢 円 形	ビーカー状	



第3図 土塚



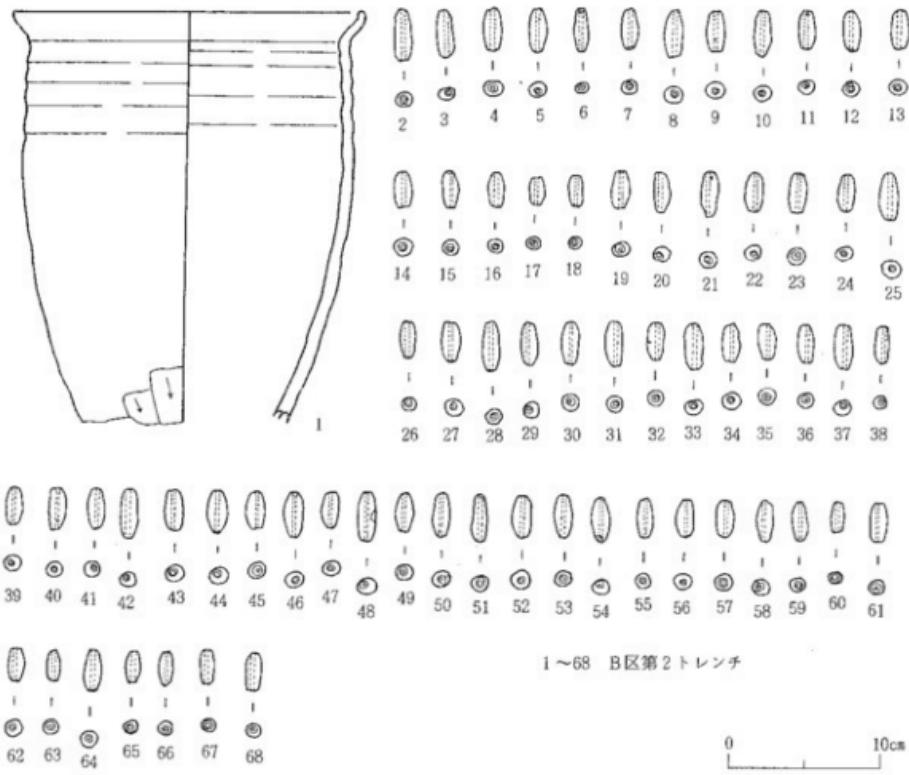
第4図 土塙



第5図 土塚



第6図 通構内出土遺物



第7図 遺構外出土遺物

### まとめ

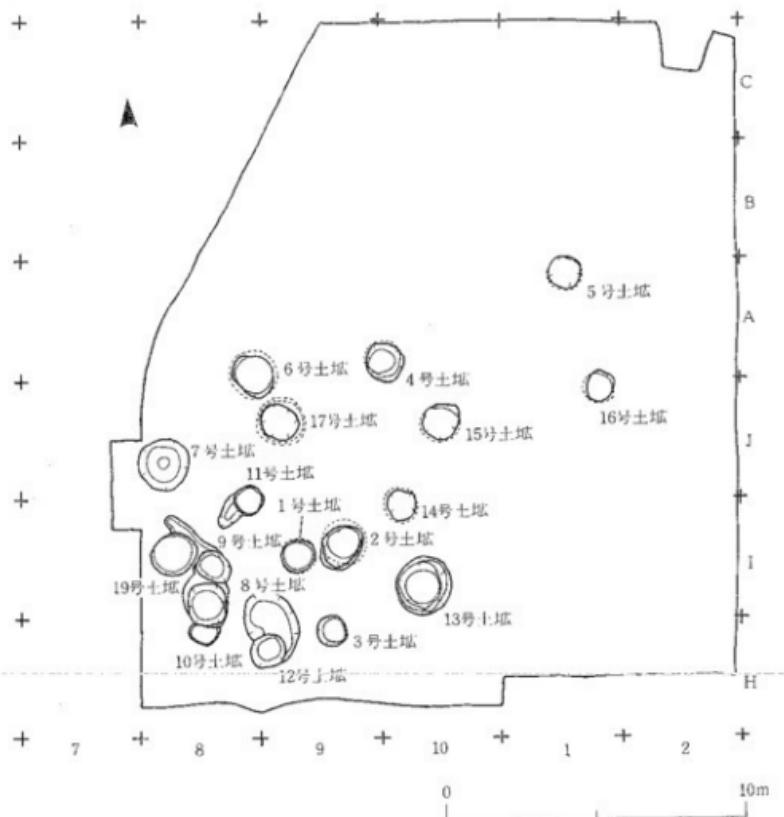
湯ノ沢I遺跡ではAからK区まで調査を実施したがK区を除き遺構は検出されなかった。出土遺物も総数で整理箱2個程である。K区は小さく西に張出す狭少な台地であり、ここから弥生時代の土塙群が検出された。他の遺構はまったく認められなかった。この土塙の性格については不明である。ただ2号土塙は底部近くから、蓋と甕が出土しており、合せ口甕塙と思われることから、蓋の可能性も考えられる。本遺跡と同様相を示す弥生時代の土塙群は沢を隔てた南約400mの沢ノ沢F遺跡でも認められる。

土塙内からは鉢形土器、甕形土器、蓋形土器などが出土している。変形工字文で連絡する頂点には、二個一対の小突起を施しているものなどがあり、湯ノ沢F遺跡と似た時期が考えられる。

## 参考文献

秋田教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984、1985

伊藤信雄、須藤隆：「瀬野遺跡—青森県下北群脇野沢村瀬野遺跡の研究」東北考古学会、1982



第8図 K区遺構配置図

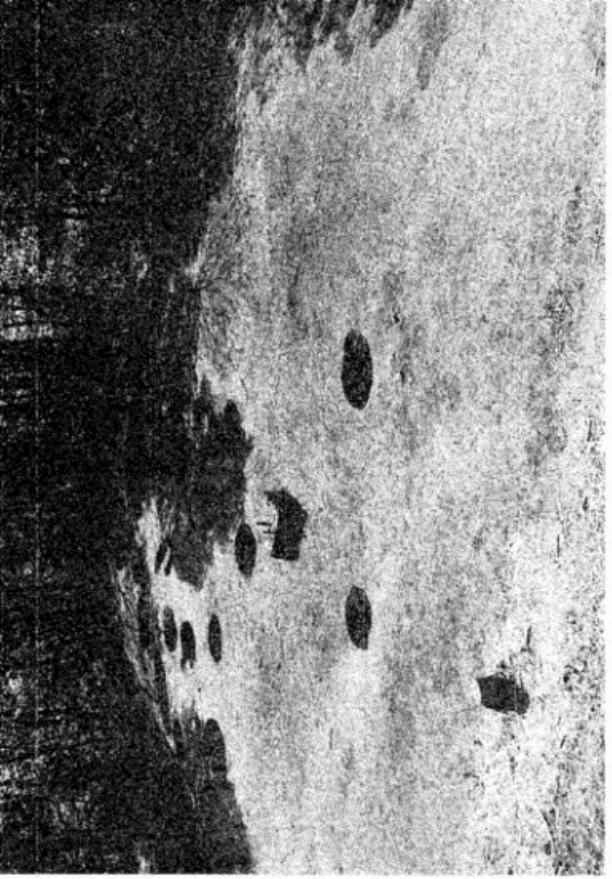
2号土坑

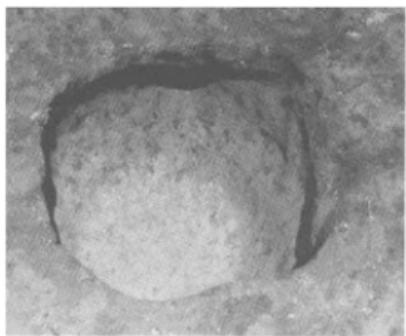


1号土坑

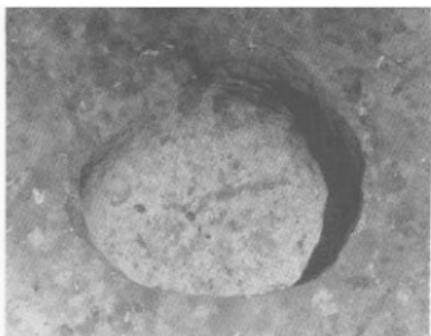


遗物全景 (东→)

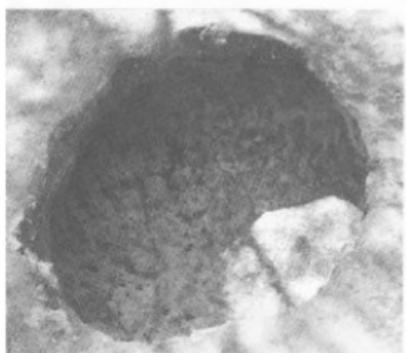




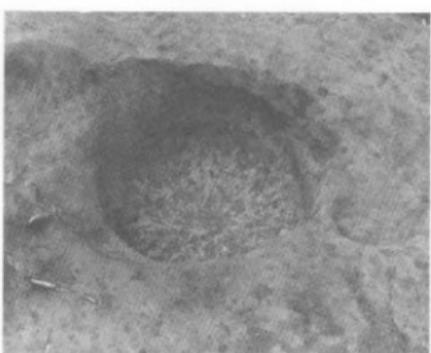
4号土坑



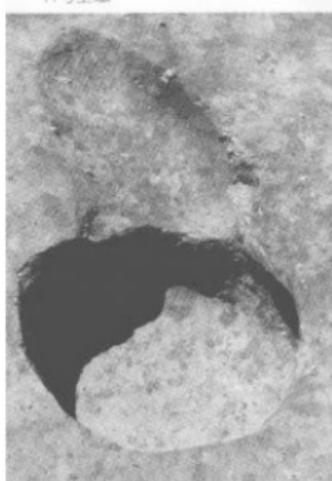
5号土坑



6号土坑



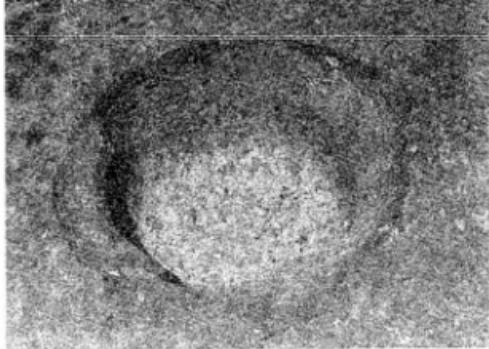
8号土坑



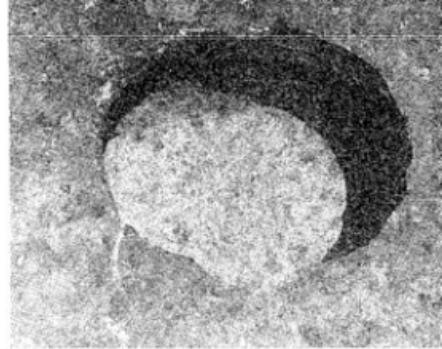
11号土坑



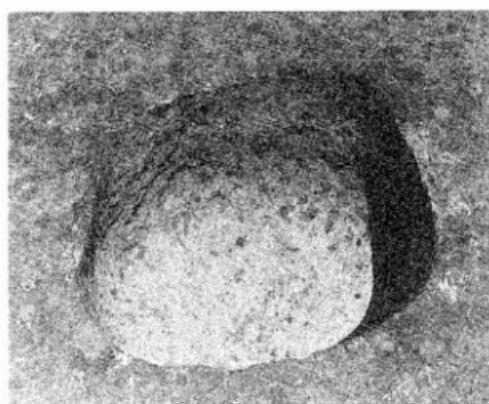
12号土坑



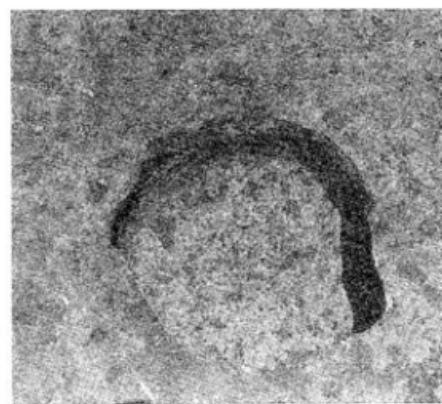
13号土块



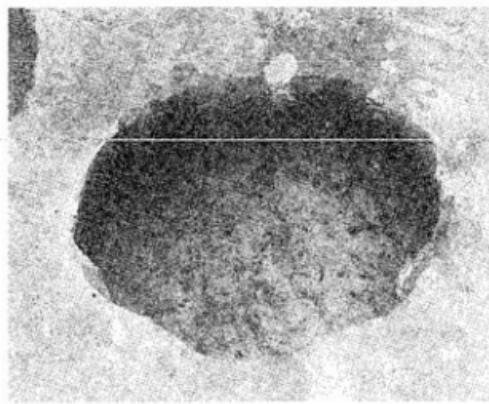
14号土块



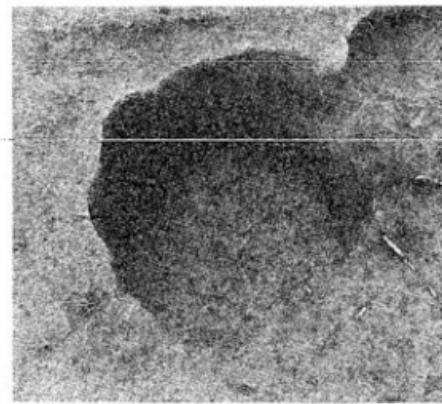
15号土块



16号土块

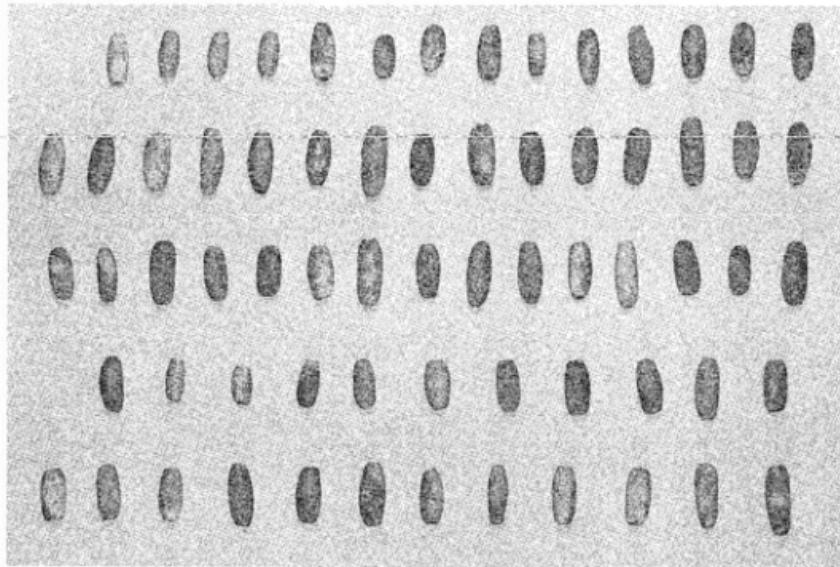


17号土块



19号土块

B区第2号土子



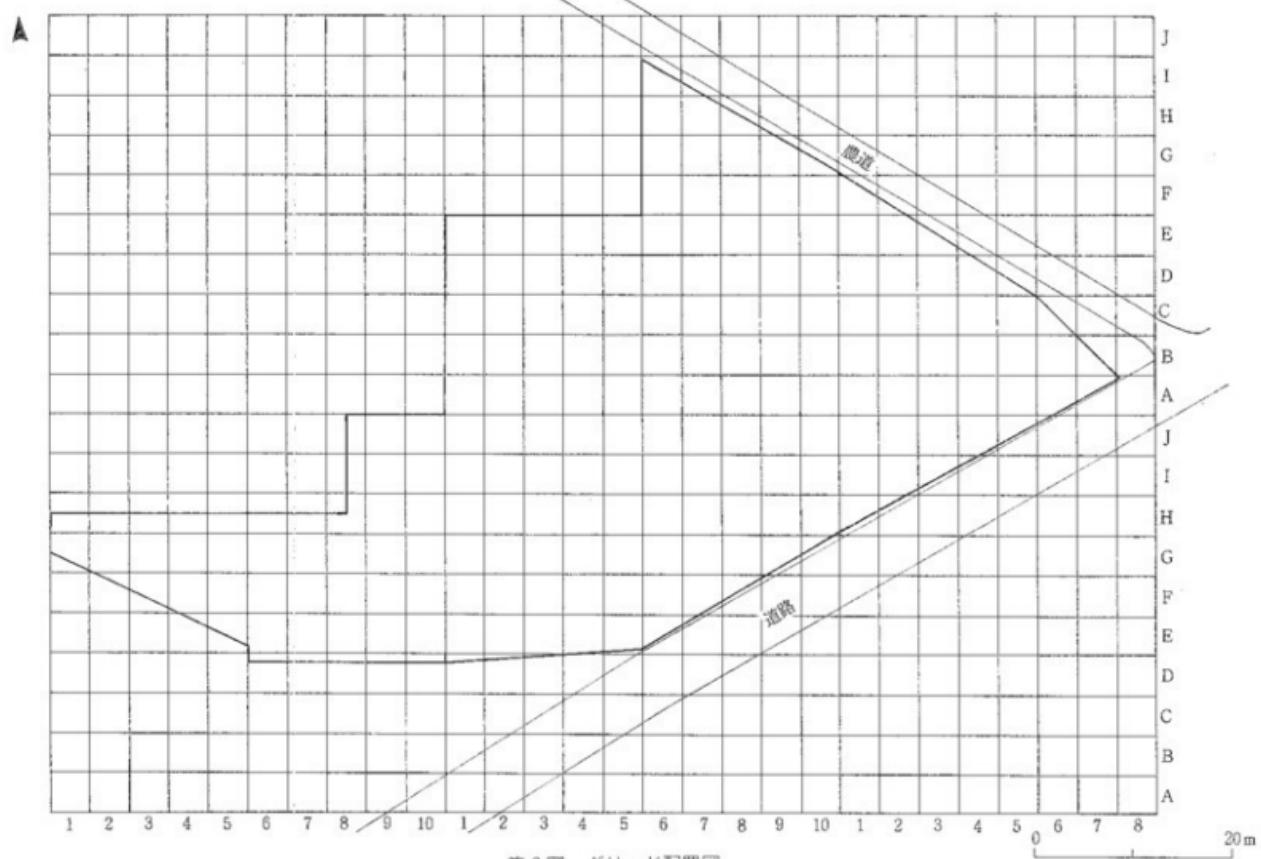
1~2 1号土址  
3 12号土址



# 湯ノ沢 F 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 グリッド配置図

## 遺跡の概観

末戸松本集落から、御所野にむける市道を東に400m程行った標高32mの西に大きく張り出す舌状台地の付け根部分に位置する。昭和58年度に一部調査を行い、主に平安時代の墓21基と鉄刀など多くの副葬品を検出している。今年度は、その全容を把握するため前回調査のできなかった範囲の発掘を行った。結果、新たに墓19基と土師器、須恵器、鉄刀などの副葬品、また弥生時代の土塙を検出した。

## 遺構と遺物

### 遺構

今回の調査で、弥生時代の土塙7基、平安時代の墓19基が検出された。これらの遺構については、表にしてまとめた。平安時代の墓については昭和58年度調査の番号を引き継ぎ使用し、22号墓からとしたが、墓一覧表では前回調査の墓も掲載している。

土塙一覧表

上塙番号	項 目	長	幅	深	形	断面形	出 土 遺 物
1 号		1.57	1.55	1.06	円 形	フラスコ状	
2 号		1.11	1.1	0.38	円 形	鍋 痕 状	第4回1・2
3 号		1.45	1.4	1.16	円 形	袋 痕 状	第4回3・4・7
4 号		1.5	1.38	0.45	円 形	袋 痕 状	第4回5・6
5 号		1.73	1.5	0.89	円 形	フラスコ状	
6 号		1.0	0.9	0.43	円 形	鍋 痕 状	
7 号		1.35	1.22	0.65	円 形	ビーカー状	

### 弥生時代遺物

本遺跡で検出した弥生時代の7基の土塙のうち3基から遺物が出土した。以下に述べることにする。

#### 2号土塙出土遺物（第4図）

土器：1・2は甌形土器である。1は内面の口縁および頸部に横方向の刷毛目がみられ、外面には横方向のカキ目を施した後に繩文を施している。地文はL Rの横および斜方向の単節斜繩文である。2は器外面の摩滅により繩文はほとんど消滅している。

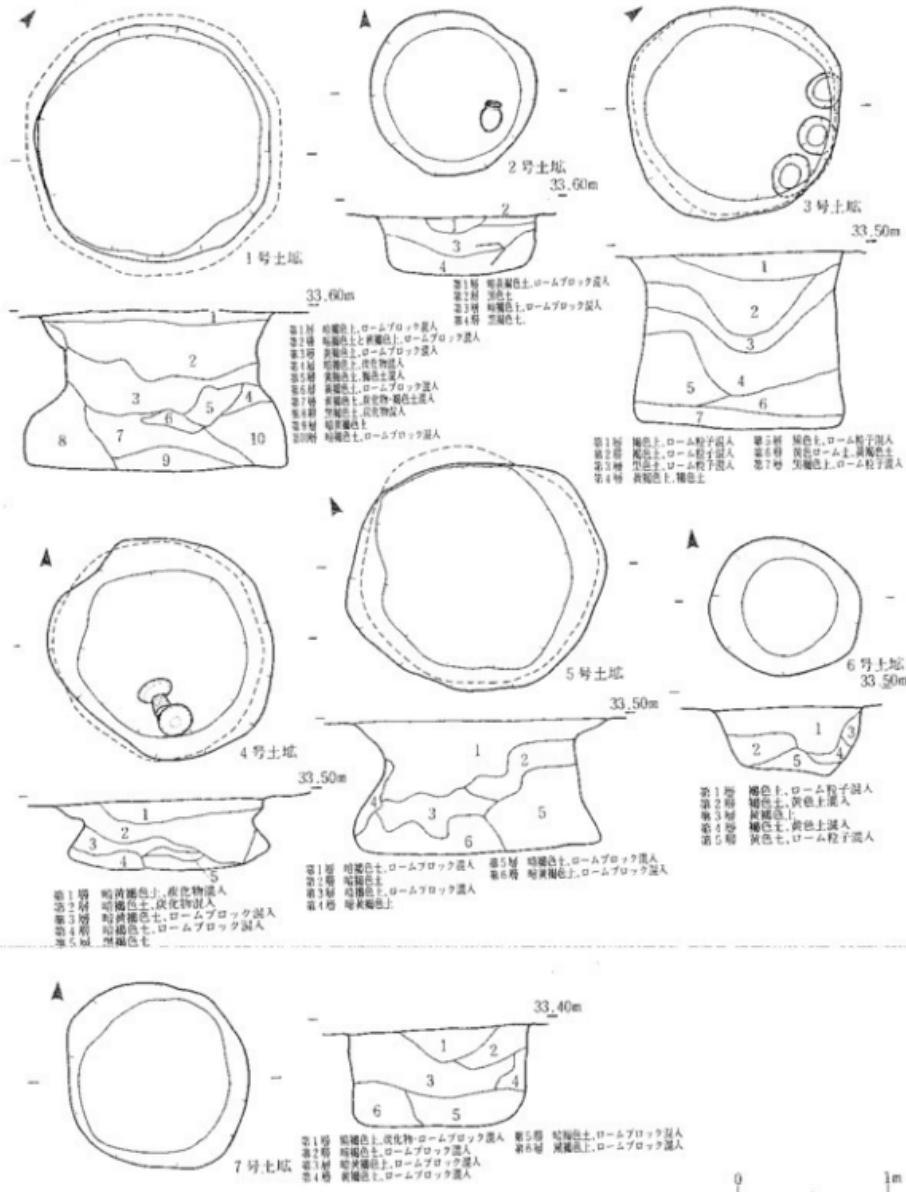
#### 3号土塙出土遺物（第4図）

土器：3は鉢形土器である。外面の口縁部と胴部に二条の平行沈線を施し、その沈線間に鋸歯状の沈線文がまわる。地文は無節の繩文である。外面には部分的にベンガラが塗られている。内面には漆状の皮膜が貼りついている。

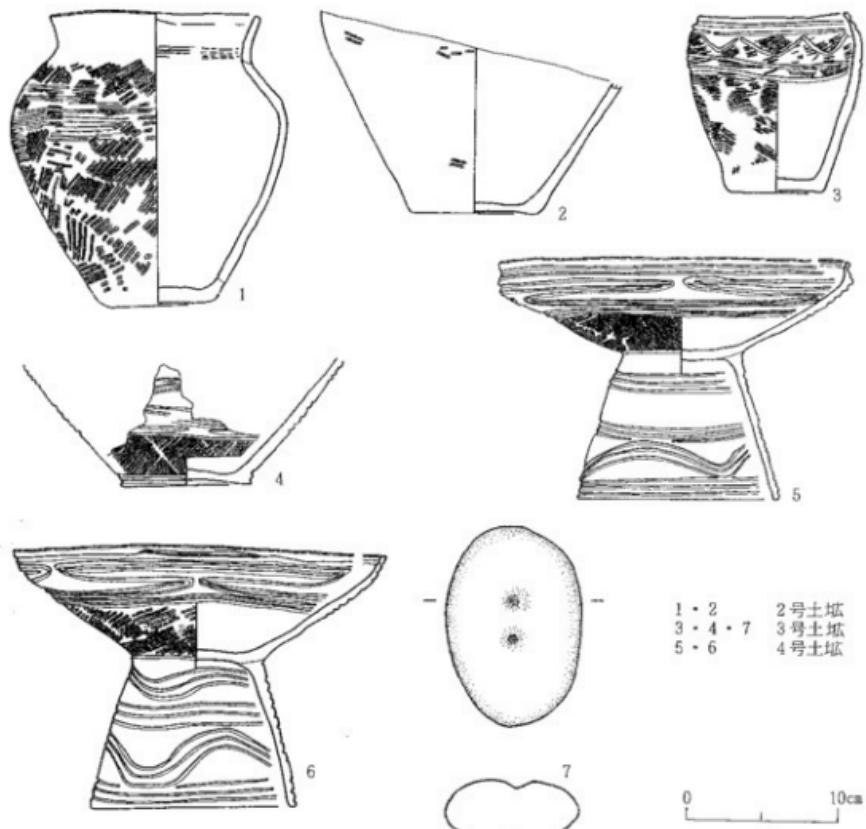
#### 7号土塙出土遺物

#### 4号土塙出土遺物（第4図）

土器：5・6は高環形土器である。口縁部に二条あるいは一条の沈線がまわり、体部上半に変形工字文を施している。体部下半にはL Rの横および斜方向の単節斜繩文が施されている。台部は高い脚部を有し、三条の平行沈線と波状文が施されている。いずれも内外面ともに磨きが施されている。



第3図 土壌



第4図 通構内出土遺物

#### 平安時代遺物

##### 22号墓出土遺物（第10図）

土器：1は底部切り離しが回転糸切り無調整の土師器杯である。内面は黒色処理を施しており、口縁部から体部は横方向、底部は放射状のミガキを施している。焼成は良好である。2は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。口縁部がわずかに外反する。焼成良好である。

鉄製品：3・4は刀子の破損である。2は茎に木質部が残っている。

##### 25号墓出土遺物（第10・15図）

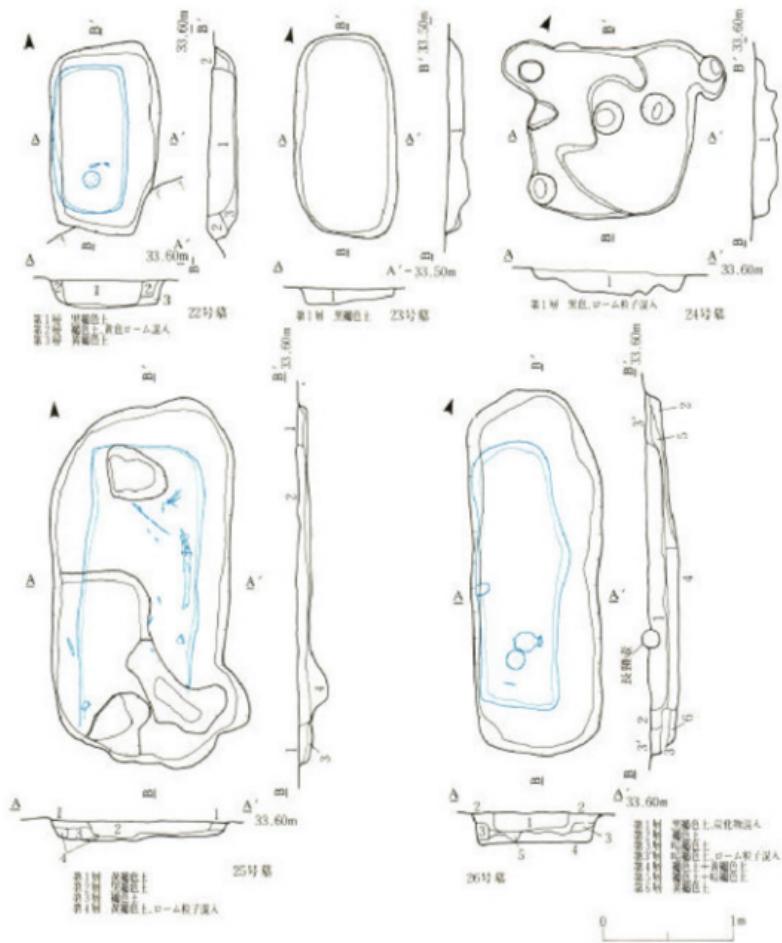
土器：5・6は須恵器長頸壺である。同一個体であるが接合しない。5は底径10.8cm、現存高20cmを計る。底部切り離しは不明であるが低い高台を貼り付け後、周縁にナデを施している。体下半部には回転ヘラケズリ、体中央部には手持ちのヘラケズリ調整を施している。焼成良好である。

鉄製品：第15図1は蕨手刀である。平造りのもので全長55cm、刃長40.8cmを計る中寸刀である。

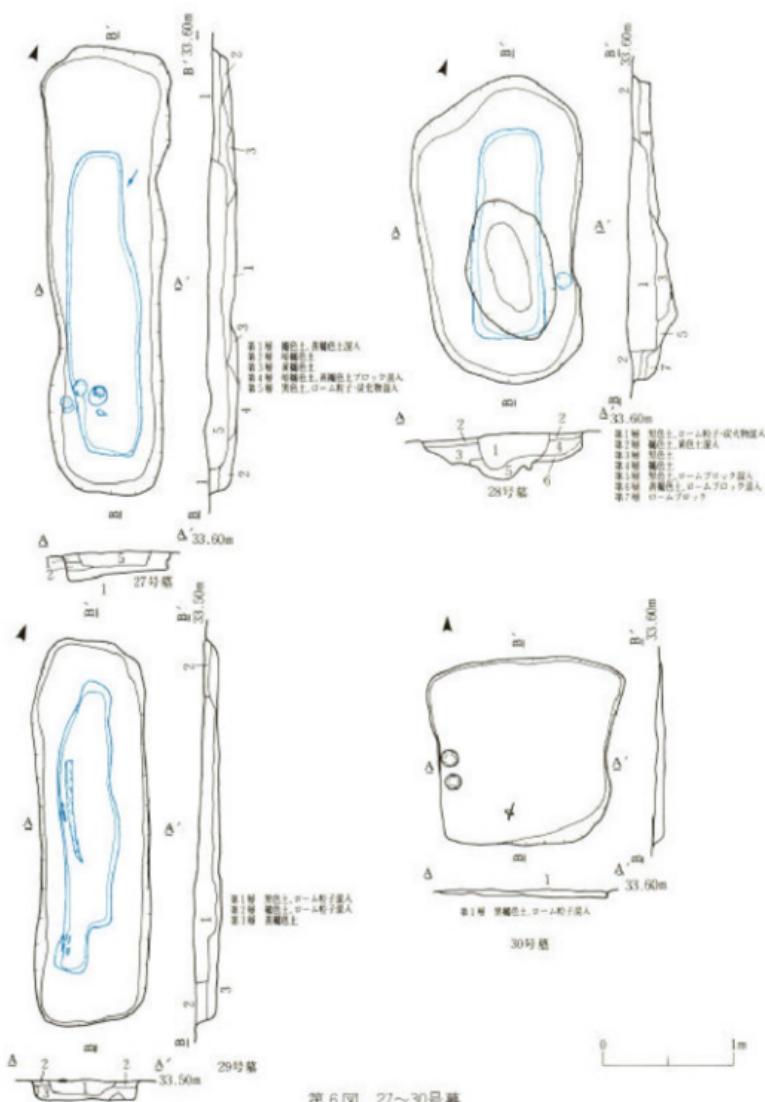
## 平安時代墓一覧表

項目 墓番号	規模(m) 長軸 × 短軸		深さ(m)		長軸方向	形 状	副葬品	備 考
	掘り方	木棺	掘り方	木棺				
1	2.74 × 1.24		0.20		N 11°W	偏丸長方形	漆皮、坊舎車	中央部溝により複乱
2	3.1 × 1.44		0.34		N 8°W	長円形	須恵器、鉄刀、刀子	
3	3.56 × 1.26	2.7 × 0.7	0.44		N	偏丸長方形	赤褐色土器、鉄刀、鉄鏹、馬具	木棺の痕跡あり、幅70cm 長さ2.7m
4	2.98 × 1.23	? × 0.68	0.32		N 32°W	偏丸長方形	赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子2、鉄鏹1	木棺の痕跡あり、幅68cm 長さ不明
5	3.08 × 1.42		0.28		N 15°W	偏丸長方形	刀子1、鉄鏹9点以上	北側複乱
6	2.76 × 1.12		0.26		N 19°W	偏丸長方形	漆皮箱、馬具	
7	3.0 × 1.2		0.32		N 16°W	偏丸長方形	内黒土師器、鉄鏹、鉄刀、不明鉄製品	鉄刀に骨片付着
8	3.1 × 1.4		0.18		N 13°W	偏丸長方形	赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子	北部複乱
9	2.2 × 1.34		0.24		N 1°W	長円形	赤褐色土器片	南、西北部複乱
10	2.56 × 1.02	1.8 × 0.7	0.74 (最深部)		N 2°W	長円形	赤褐色土器坏	木棺の痕跡あり、幅70cm 長さ1.8m
11	1.46 × 0.94		0.30		N 26°W	長円形		
12	2.94 × 1.1		0.30		N 8°E	偏丸長方形		
13	2.1 × 1.94		0.40		N	偏丸長方形	刀子、坊舎車	
14	2.9 × 1.7		0.20		N 10°30'W	偏丸長方形	赤褐色土器环、鉄刀、刀子	北側複乱
15	4.10 × 1.48		0.18		N 1°W	偏丸長方形	刀子	
16	3.64 × 1.06		0.14		N 24°W	偏丸長方形	内黒土師器、鉄刀、鉄鏹、鐵鏹、鍔先、不明鉄製品、帯金具、鉄貨	上部削平
17	3.64 × 1.3		0.35		N 8°E	偏丸長方形	鉄鏹	上部削平
18	1.94 × 0.68		0.10		N 1°W	偏丸長方形		上部削平
19	2.1 × 0.66		0.10		N 18°W	長円形	鉄刀1、刀子1	上部削平
20	3.0 × 1.1	2.2 × 0.5	0.24		N 16°E	偏丸長方形	赤褐色土器、刀子	木棺の痕跡あり、幅50cm 長さ2.2m

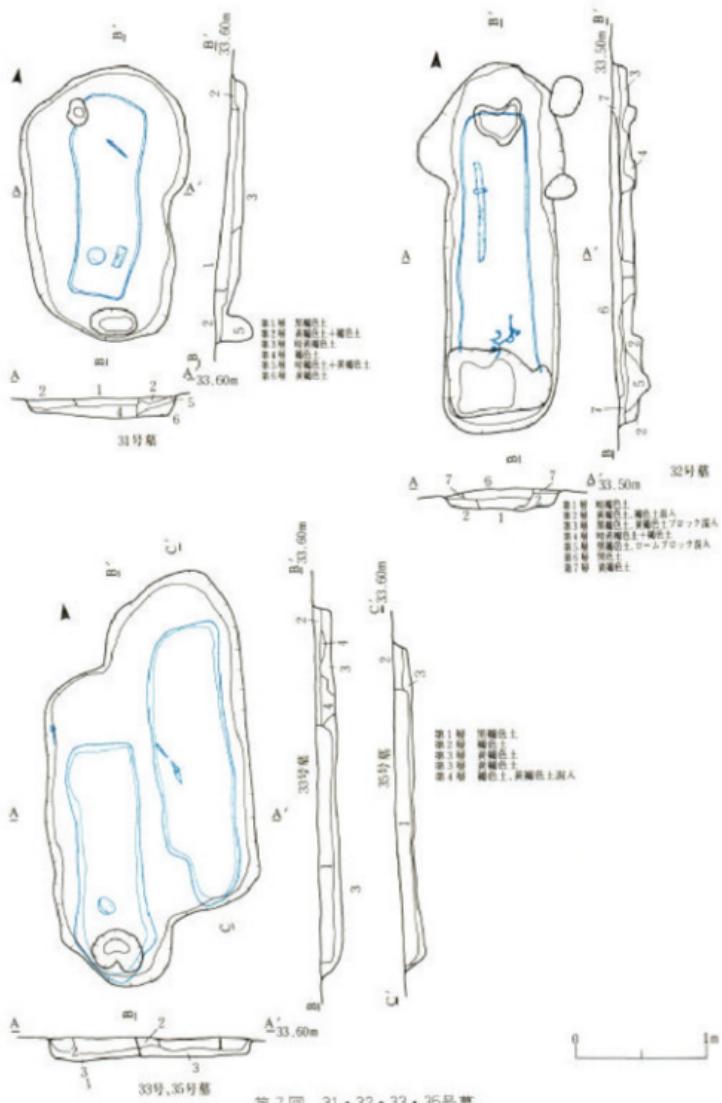
項目 墓番号	規模(m) 長 軸 × 短 軸				深さ(m)		長軸方向	形 状	副 著 品	備 考
	掘り方	木棺	掘り方	木棺						
21	2 m以上×0.9			0.26			N	隔丸長方形	赤褐色土器、刀子、纺錘車	南側土手のため不明
22	1.42 × 0.82	1.12 × 0.6	0.22	0.2			N 3°E	隔丸長方形	内黒土器壺、赤褐色土器壺	北側攤亂
23	1.52 × 0.78			0.15			N 13°W	隔丸長方形		
24	1.28 × 1.27			0.18			N 14°W	不整形		
25	2.82 × 1.36	2.13 × 0.88	0.15	0.12			N 1°W	長円形	長頸壺、鉄鏃、鉄刀、刀子	歯手刀
26	2.78 × 0.98	2.04 × 0.66	0.24	0.15			N 20°W	隔丸長方形	長頸壺、赤褐色土器壺、刀子	長頸壺の底部…菊花状文
27	3.4 × 0.91	2.3 × 0.57	0.25	0.18			N 21°W	隔丸長方形	長頸壺、赤褐色土器壺	
28	2.31 × 1.23	1.58 × 0.52	0.37	0.23			N 21°W	長円形	赤褐色土器壺	
29	2.9 × 0.83	2.24 × 0.45	0.22	0.18			N 20°W	隔丸長方形	鉄刀、鉄鏃	
30	1.43 × 1.27						N 1°W	不整形	赤褐色土器壺、纺錘車	
31	2.08 × 1.25	1.51 × 0.48	0.17	0.10			N 1°W	長円形	赤褐色土器壺、鉄鏃、刀子	
32	2.79 × 0.87	2.32 × 0.56	0.17	0.08			N 6°W	隔丸長方形	鉄刀、馬具	鐸…鉄十字通鐸
33	2.42 × 0.85以上	1.8 × 0.5	0.15	0.1			N 3°E	長円形	赤褐色土器壺	35号墓によって東側が切られている
34A	3.0以上×2.7	2.6 以上×0.67	0.22	0.2			N 2°W	隔丸長方形	刀子、内黒土器壺	棺材(?)検出、南側削平。34Aより頭蓋冠・顎面骨・上肢骨出土
B		2.05以上×0.62	0.22	0.15			N 7°W			
35	2.55 × 1.05	2.12 × 0.6	0.17	0.13			N 2°E	長円形	刀子	
36A	2.2以上×2.3	1.63以上×0.53	0.2	0.11			N 8°W	隔丸長方形	鉄刀2、刀子、鉄鏃、石器(丸棒1、遙方4)	南側削平
B		1.4 以上×0.53	0.17	0.11			N 2°W		纺錘車	
37	1.0以上×1.3	0.8 以上×0.7	0.27	0.18			N 8°W	隔丸長方形		裏込め下部に炭化物
38	0.6以上×1.0	0.6 以上×1.0	0.23	0.18			N 21°W	長円形		



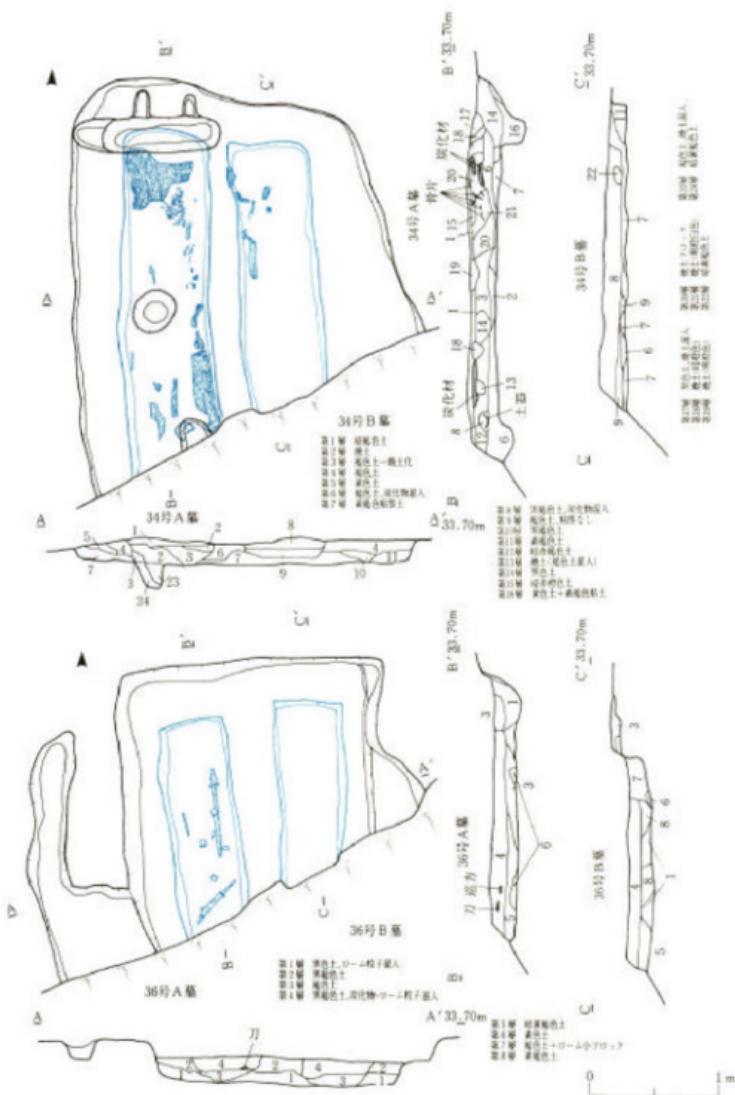
第5図 22~26号墓



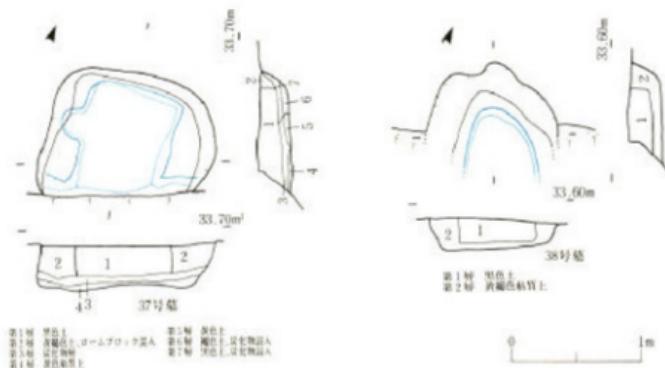
第6図 27~30号墓



第7図 31・32・33・35号墓



第8図 34号A・B・36号A・B墓



第9図 37・38号墓

「鋸つく」でカムス切先である。鋸は、はみ出し鋸で絞り小判型で、柄先の形は半月形を呈する。柄の絞りはつよい。区は判然としない。鞘木片が残存している。全体に銹化が著しい。7・8は刀子である。7は全長14.8cm、刃長7.2cmである。茎に一部木質が残存している。8は一部欠損しているが同様に木質が付着している。鉄鎌は9個出土した。いずれも茎、先端部の一部が欠損している。9は現長13.4cmの雁股の鎌である。茎に一部木質部が付着する。10・13・14・16・19・の茎にも木質部が付着している。

#### 26号墓出土遺物（第11図）

土器：18は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部からゆるく内湾しながら口縁部に至る。焼成良好である。20は須恵器長頸壺である。口縁部は欠損している。頸部から肩部にかけて丸みをおびながら底部に至る。底部は回転糸切りである。糸切り後に体下端および底部をつまみ出し低い高台をつけている。その結果菊花状の文様がみられる。周縁にはナデを施し整形している。

鉄製品：19は刀子破片である。非常に小型のもので刃長2.5cmである。茎に木質部が付着している。

#### 27号墓出土遺物（第11図）

土器：21・22は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から21は内湾、22は直線的に口縁部に至る。いずれも焼成は良好である。23は須恵器長頸壺である。口径6.6cm、底径7.2cm、器高15.5cmを計る。底部は回転糸切りである。低い高台を貼付後、周縁にナデを施し整形している。焼成は良好である。

鉄製品：24は刃先の欠損する刀子である。茎に木質部が付着している。

#### 28号墓出土遺物（第11図）

土器：25は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。口径に比して底径が非常に小さい。底部から直線的に口縁部に至る。焼成は良好である。26は小型の土器器皿である。ゆるく内湾しながら直線的に口縁部に至る。焼成は良好である。26は小型の土器器皿である。ゆるく内湾しながら口縁部に向かい、口縁はわずかに外反する。外面は黒、内面は横方向にカキ目痕がみられる。

#### 29号墓出土遺物（第11・15図）

鉄製品：27は刀の一部が欠損する刀子である。基には柄の木質部が残存している。28～35は鉄鎌である。28は、全長14.5cmを計る。先端部は扁平で鋭利である。他は破片であるが29・32・35は茎に木質部が残存している。第15図2は鉄刀である。全長75cm、刃長57cm、身巾3.6cmを計る。切先は、「鍔つく」でカマス切先である。茎にハバキ金がみられる。刃部は直線的であるが柄は急に上方へ反る。目貫穴がみられる。全体に錆化が著しい。

#### 30号墓出土遺物（第12図）

土器：36～38は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。いずれも底部からゆるく内湾しながら口縁部に至り、口縁はわずかに外反する。焼成は良好である。36の体部に漆状の付着が認められる。

鉄製品：39は身先端部破片の鉄鎌である。40は現長1.9cmの鉄釘である。41は筋鍤車である。筋輪径6cm、筋茎長8.4cmを計る。筋径の両端は欠損している。錆化が著しい。

#### 31号墓出土遺物（第12図）

土器：42は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。焼成良好である。

鉄製品：43は現長13cmを計る刀子である。切先と基の一部は欠損している。基には木質部が残存している。44は鉄斧である。長さ14cm、巾5.7cmを計る。柄をうける部分は鉄板を折り曲げてつくっている。錆化が著しい。

#### 32号墓出土遺物（第12・16図）

鉄製品：45～50は用途不明の製品である。45・46は木質が付着し、上部から釘が打たれている。これらは馬具の一部とも考えられる。51・52は馬具の骨部である。左右の鏡板とハミである。錆化が著しい。第16図5は鉄刀である。全長74.7cm、刃長53.3cm、身巾1.0cmを計る。切先は、「鍔つく」でカマス切先である。茎に鉄十字透かし鶴が明瞭に残存している。柄は上方に反り、中央部が少しくぼんでいる。柄の反りに比して刃部は直線的である。

#### 33号墓出土遺物（第13図）

土器：53は回転糸切り無調整の赤褐色土器杯である。底部から外反しながら立ち上がり、その後内湾しながら口縁に至る。焼成は良好である。

鉄製品：54は刀子である。切先は欠損している。全体に錆化が著しく、部分的に「ふくれ」がある。

#### 34号A墓出土遺物（第13図）

上器：55・56は、内面黒色処理を施した土師器杯である。いずれも回転糸切り無調査で、内面体部は横方向、底部には放射状の「ミガキ」がみられる。

### 35号墓出土遺物（第13図）

鉄製品：57は刀子である。切先は欠損している。全体に錆化が著しい。茎には木質部が残存している。

### 36号A・B墓出土遺物（第13・16図）

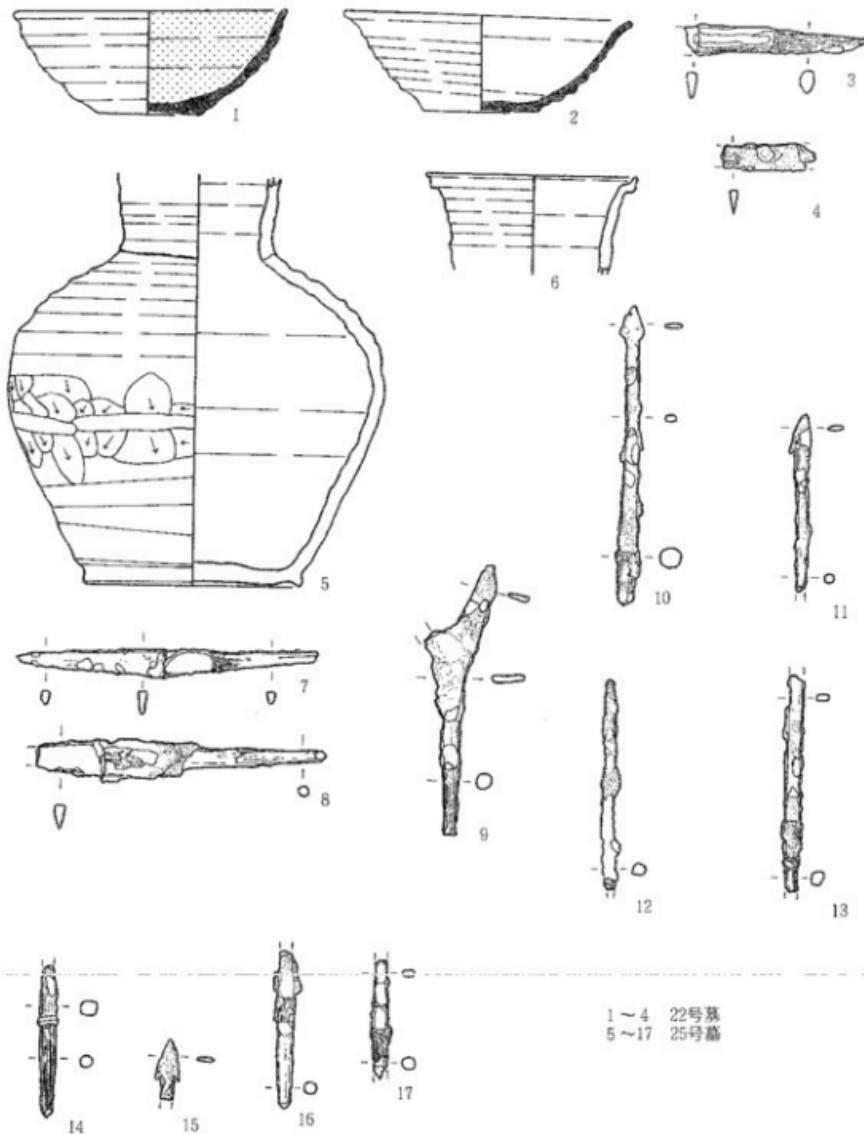
上器：埋上上面から出土した。58は土師器の小型壺と思われる。口縁部がわずかに外反する。胎土中には小石粒が多く含まれ、焼成はやや不良である。

鉄製品：59は刀子である。茎の一端は欠損するが、本質部が残存している。60は大形の鉄鎌である。全長14.5cmを計る。身は扁平である。66はB墓から出土した紡錘車である。紡輪径5.5cm、紡錘長19.3cmを計る。紡錘の両端は欠損している。全体に錆化が著しい。第16図3・4は鉄刀である。69は全長66.2cm、刀身53cm、身巾約0.7cmを計る。刀身は直線的である。銅製の脛金、鉤が良好に残存している。また柄の二ヶ所に目貫穴があり、一ヶ所に銅製の飾り金具がみられる。鞘の木質部が残存しており、足金具、佩環が良好に残っている。70は全長43.2cm、刀身39cm、身巾約1.0cmを計る。切先は「鉋つく」でカッス切先である。茎には「脛金」が残存している。全体に錆化が著しい。

石製品：61～65は石帶である。巡方4点、丸柄1点が出土した。巡方は一辺がおおむね4.1～4.2cm、厚さ0.55cmである。裏面の4ヶ所には一对の小孔がある。68は丸柄である。長さ3.7cm、厚さ0.6cmである。裏面の3ヶ所には一对の小孔がある。巡方、丸柄とも表裏に黒色の漆状の付着物がみられる。

### 遺構外出土遺物（第16図）

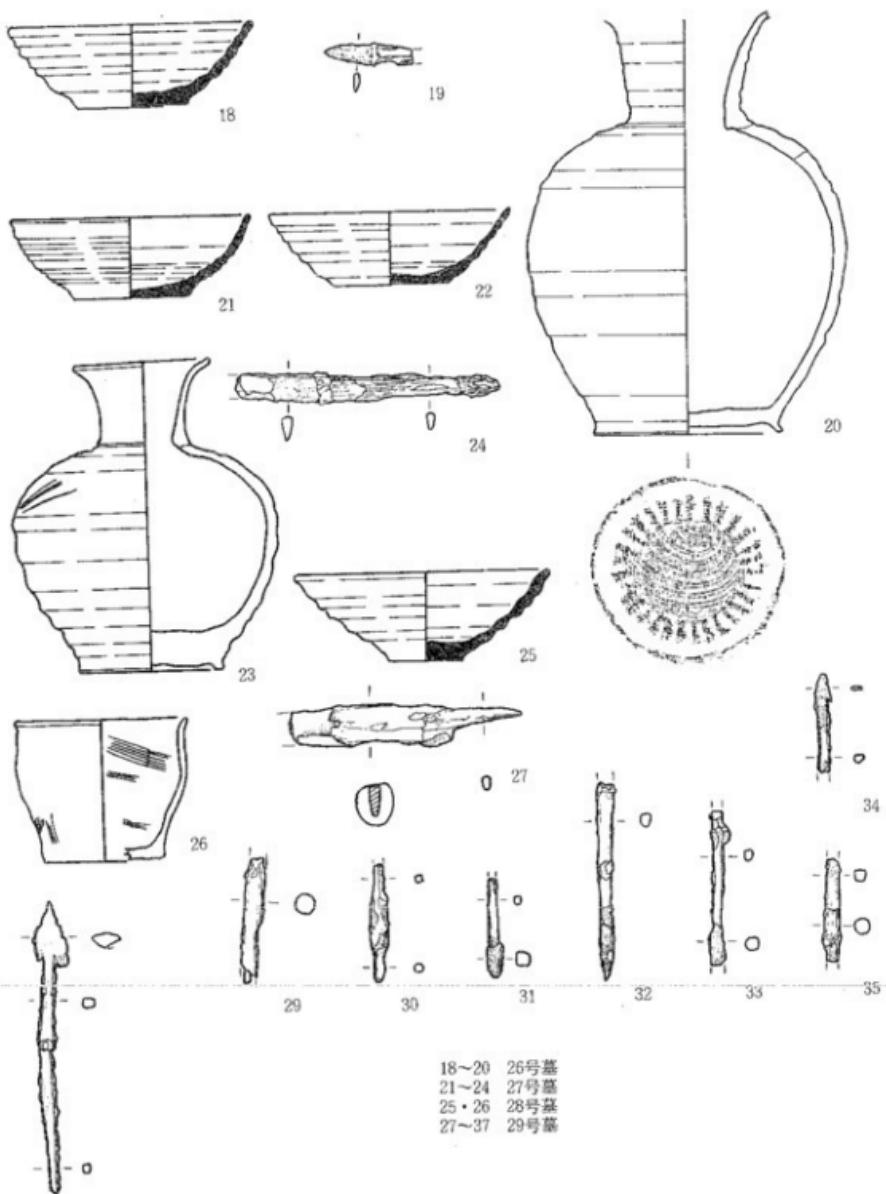
1は土師器の小形壺形上器で、内面にきれいなカキ目を施している。2は須恵器の壺形土器で、長頸壺と思われる。外面には横方向に回転ヘラケズリを施し、後に手持ちヘラケズリを施している。3～12は鉄鎌である。3～7は扁平で鋭利な先端部、8～12は茎の部分で、矢柄の木質が残存している。13は表採資料の鉄斧である。14は紡錘車である。紡輪径5.5cm、紡錘長10cmを計る。いずれも欠損している。



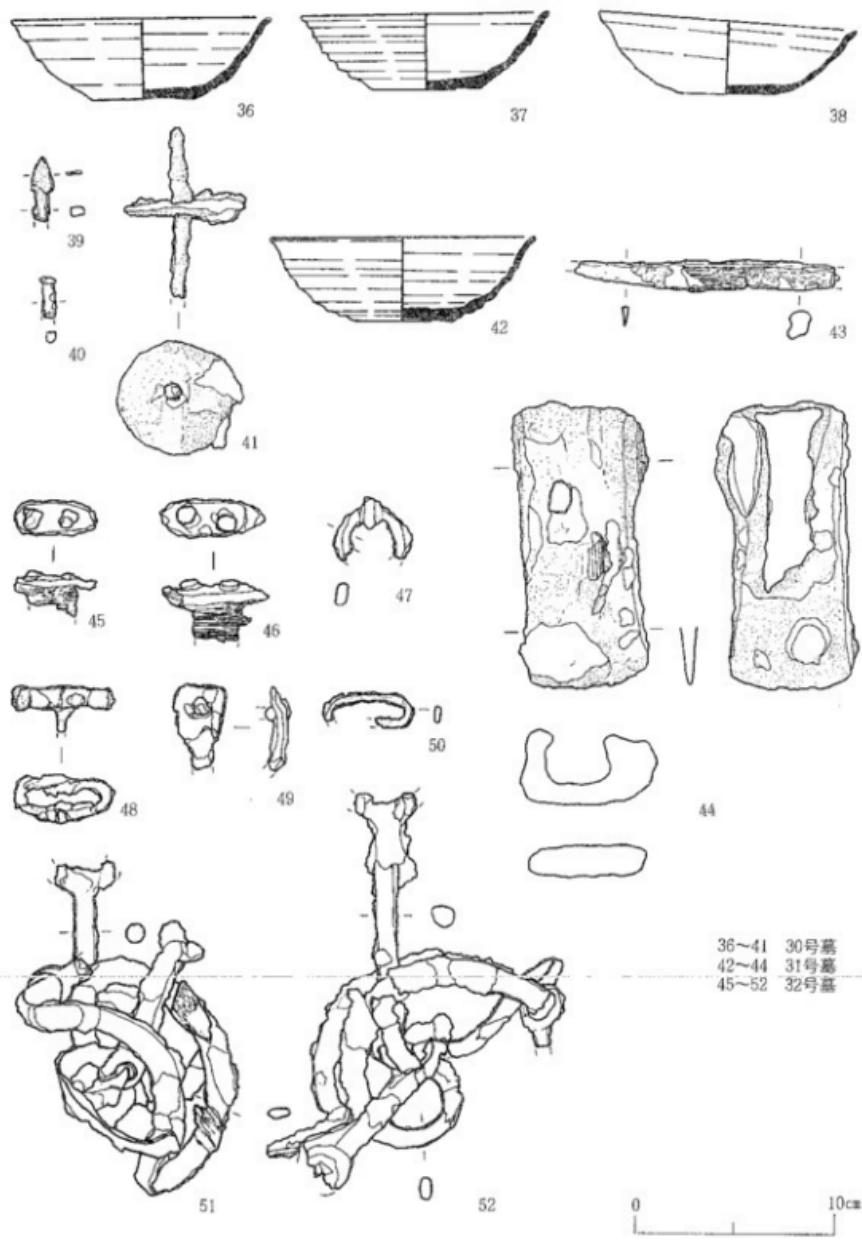
1 ~ 4 22号墓  
5 ~ 17 25号墓



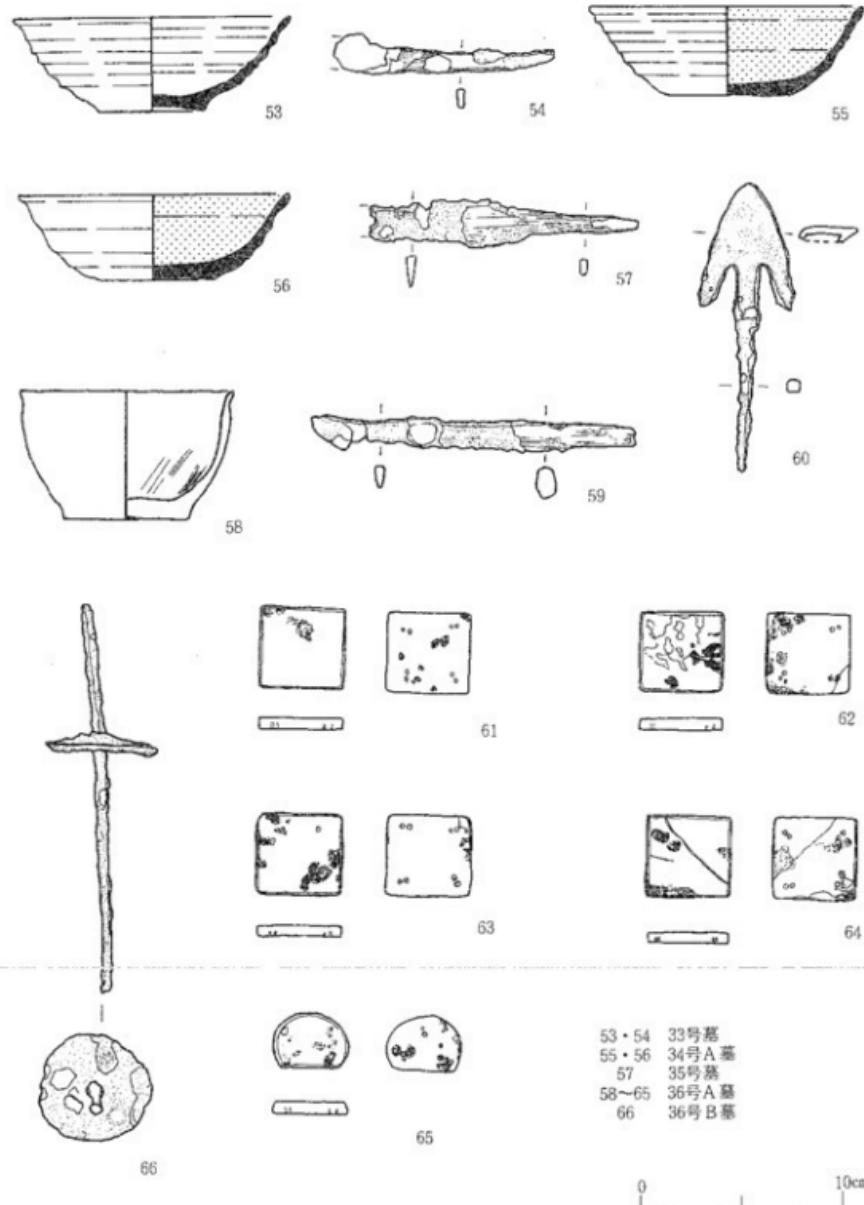
第10図 遺構内出土遺物



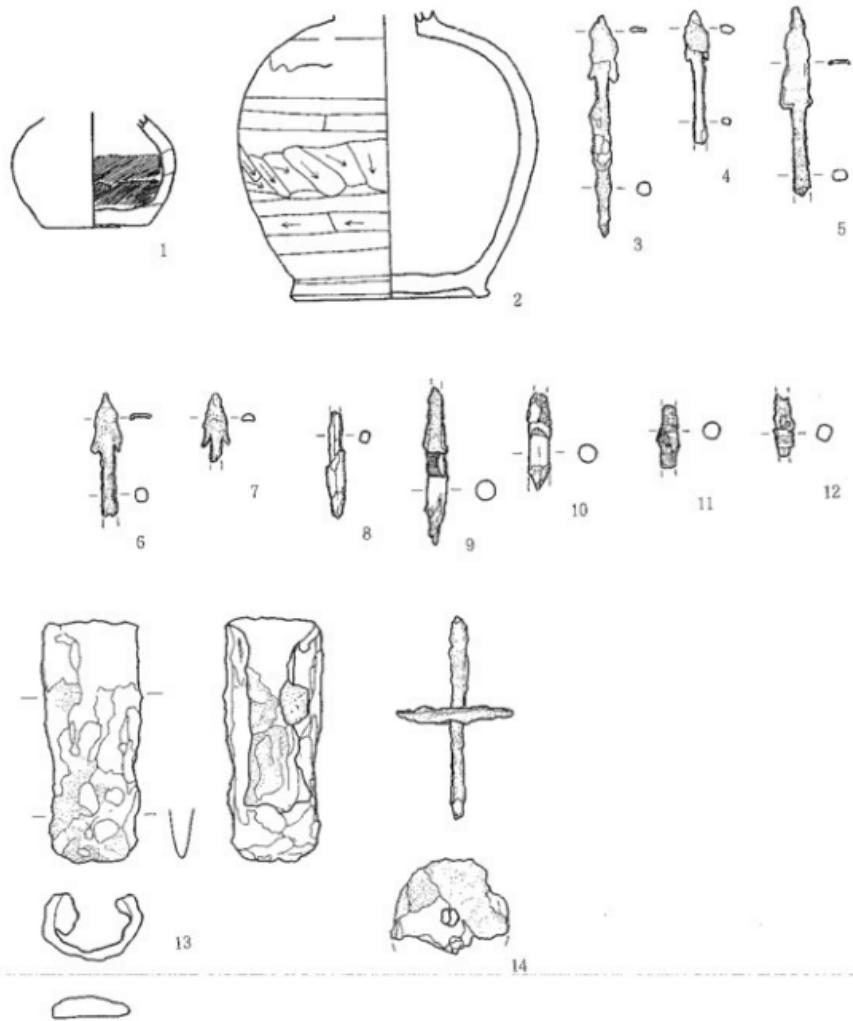
第11図 遺構内出土遺物



第12図 遺構内出土遺物

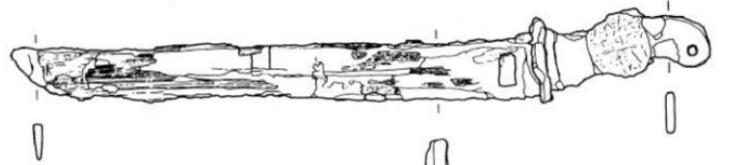


第13図 遺構内出土遺物

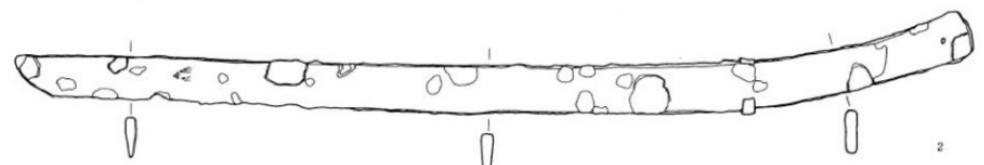


0 10cm

第14図 遺構外出土遺物

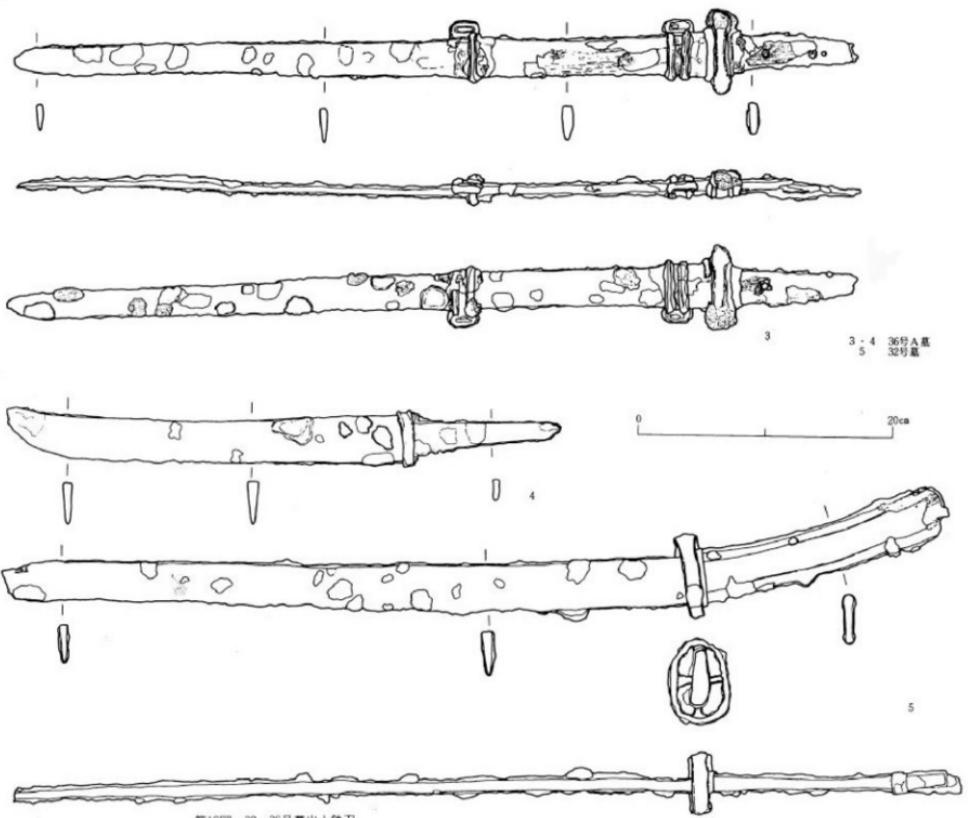


1・25号墓  
2・29号墓



第15回 25・29号墓出土鐵刀

0 1 20cm



第16图 32·36号墓出土铁刀

## まとめ

### 弥生時代

本遺跡では土塙7基が検出された。他に弥生時代の遺構は認められない。土塙の広がりも一ヶ所に集中している。本遺跡と同様相を示す土塙群は沢を隔てた北東約400mの湯ノ沢I遺跡でも検出されている。

2・3・4号土塙からは鉢形土器、変形土器、高環形土器などが出土している。遺構の性格については不明である。

時期については、4号土塙から高環形土器の完形品が2個体出土している。いずれも体部に変形工字文を、台部に平行・波状の沈線文をめぐらしている。この土器は山王Ⅲ層式に比定できるものであり、弥生時代中期前葉の時期が考えられる。

### 平安時代

本遺跡では今年度調査で新たに19基の墓を検出した。昭和58年度調査で検出したものも含めると合計40基となり、この地域が大規模な墓域であったことが判明された。ここでは前回調査で述べたことに加筆し、さらに新しく判明したことについて簡単にまとめてみたい。

立地：西に張り出す大きな舌状台地の付根に位置する。北東、南西方向から大きな沢が入り込んでおり、墓の場所は最も標高の高い所である。墓は、東西63m、南北36mの橢円形の範囲におさまるようである。等高線はこの地域ではほぼ同心円状にまわり、ゆるいマウンド状を呈する。

構築方法：特異な34号A・B、36号A・B墓を除くと、規模に差はあるがプランは隅丸長方形、長円形を呈している。構築順序は①規模を決定し掘り方を掘る。②底部をある程度平らに整地する。木炭を敷いている墓もある（37号墓）。③中央部に木棺を安置する。木棺土に石を配置する墓もある（6号墓）。④掘り上げた土（黒色土・ローム）を埋め戻しする。この時マウンドをつくったものか不明である。のようである。34号A・B、36号A・B墓の構築順序も①～④と同様であるが、大規模な掘り方を掘っている。木棺痕跡状況などから二遺体が一緒に埋葬されたと思われる。

規模：墓の掘り方規模で最大のものは15号墓で、長軸4.1m×短軸1.48m、最小の11号墓で長軸1.46m×短軸0.94mである。平均値は長軸2.51m、短軸1.22m、深さ0.24mである。木棺痕跡規模で最大は3号墓の長軸2.7m×短軸0.7m、最小は22号墓で長軸1.12m×短軸0.6mである。

長軸方法：N32°WからN20°Eの範囲にすべてがおさまる。長軸方法から墓を分類してみると次のようになる。

N0°≤α<10°E 12・17・22・33・35号墓

N10°≤α<20°E 20号墓

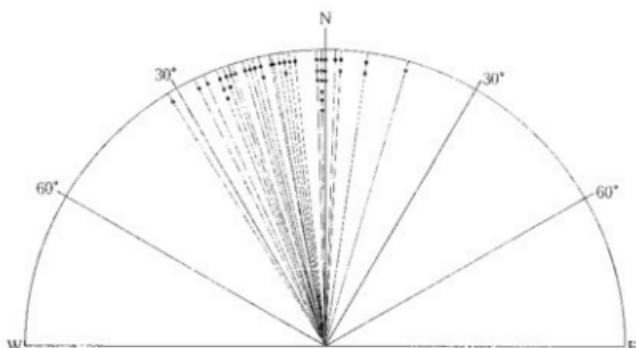
N0°≤α<10°W 2・9・10・15・18・25・30・31・32・34A・B・36A・B・37号墓

N10°≤α<20°W 1・5・6・7・8・14・19・23・24号墓

N20°≤α W 4・11・16・26・27・28・29・38号墓

これをみると概略北方  
向を意識してはいるが  
真北・磁北にはこだわ  
っていない。むしろ北  
北西を指すものが多い。  
埋葬形態：木棺である。  
昭和58年度調査でも本  
棺が想定されている。

今回の調査でも木棺痕



第17図 長軸方位

跡が明瞭に認められる墓が16基検出されている。特筆すべきことは、火熱を受けている34号A墓から人骨とともに木棺痕跡の線に沿って炭化した木棺材の一部が検出された。鑑定の結果杉材であることが判明した。形状については断面が半円形をなし杉材を半載したもののようにも思えるが一部分であり明瞭には把握できない。

埋葬頭位：頭位については昭和58年度調査で、副葬品の位置関係から北頭位を推定していた。今次調査では頭位を決定づける資料として34号A墓から人骨が出土（頭骨・鎖骨・上腕骨）した。出土人骨は北頭位で埋葬されており、1基だけであるがこの人骨出土により本遺跡の墓は北頭位と思われる。

性別：性別については前回の調査で、規模、副葬品からある程度推定している。今次調査では二遺体が一緒に埋葬されたと考えられる34号A・B、36号A・B墓の出土品に興味深いものがある。34号A墓から出土した人骨は鑑定の結果、推定年令40～50才の成人男性であることが判明した。36号A・B墓では、A墓から鉄刀、鉄鎌、刀子、石斧などが出土しているがB墓からは紡錘車1点の出土である。34号墓の一方は男性と判明し、36号A・B墓では明らかに出土遺物の相違がみられる。この違いは性別の相違によるものなのか興味深い。

墓の変遷：40基の墓で重複関係にあるものは33・35号墓だけであり、新旧関係をたどることは困難である。しかし一度に40基の墓を構築したとは考えがたい。墓の配置をみるとある程度規則制がみられ、8グループに分けることが可能のようである。①4・11号墓、②2・6・7・8・9号墓、③3・10・12号墓、④14・15号墓、⑤20・21号墓、⑥22・38号墓、⑦26・27・28・29号墓、⑧30・31号墓となり、これらのグループは「まとまり」を示し、極めて隣接しているが重複ではなく、それぞれ長軸方向がほとんど一致しているものである。これは、互いを意識して構築されたと考えられ構築時期にそれほどの差はないと思われる。

被葬者について：被葬者を推定することは極めて困難である。しかし考える上で興味深い遺物が3号墓副葬品として出土している。底部にヘラ書きで「夫」と刻まれた回転糸切り無調整の赤褐色土

器坏である。これと同様の資料が北海道の「北大構内の遺跡」<sup>註3</sup>から、また墨書き資料として「平城宮」<sup>註4</sup>の S D 2700遺構から出土している。それぞれ「夷」の異体字と判読している。本遺跡出土の土器も極めてこれに類似しており、「夷」と判読できるものと考えられる。「夷」の土器について二氏が興味ある見解をしめしている。1つは関口明氏が「北海道式古墳と渡島蝦夷」という論文の中で、渡島の蝦夷が出羽の国にきて国司と交易した際に国司が饗宴を開いて蝦夷をもてなしし物品を給与していたことを重視し、「夷」の文字が刻まれた土器は「饗宴」<sup>註5</sup>の場で使用された坏が持ち込まれたものであろうとしている。また「平城宮」S D 2700遺構出土の墨書きのある「夷」の土器については、佐伯有清氏が「…この地区出土の墨書き土器の多くは宴会用の食器であったと考えてよい。宝龟五年（774年）には出羽の蝦夷を朝堂で饗宴したことがあった。そこで「夫」と書かれている須恵器の坏も饗宴の場で使用されたものと考えられ……」と述べられている。いずれも蝦夷に給したものと考えられており興味深い。そうした中で本遺跡出土の「夫」の土器も秋田城との関連の中で上記のように考えることができないものであろうか。

時期について：本遺跡の年代を副葬品の土器から考えてみたい。坏では赤褐色土器が主体を占める。器厚の薄い、回転糸切り無調整のものである。この土器は技法的に新しいものとされ、10世紀以降の年代が考えられる。また、26号墓出土の須恵器長頸壺の底部には、菊花状の文様が認められ、同様の土器が青森県「三内遺跡」<sup>註6</sup>、払田柵跡の外部北西部付近から出土しておりそれぞれ10世紀中半以降の年代が考えられている。32号墓の副葬品の鉄刀の鍔は「鉄十字透鍔」と呼ばれ、青森県「朝日山遺跡」<sup>註7</sup>から極似するものが出土している。石井昌國氏の論考によれば、平安時代中頃の時期が考えられている。以上のようにみると本遺跡の年代も10世紀以降の年代が考えられ、特に10世紀中半を中心とする時期と思われる。

註1. バリノサーベイ株式会社

註2. 349頁、湯ノ沢F遺跡出土人骨の鑑定書

註3. 「北大構内の遺跡」3、北海道大学、昭和59年3月

註4. 「北大時報」2、No.347、北海道大学埋蔵文化財調査室、1983、

「北海道新聞」昭和60年、7月27日付夕刊。

註5. 関口 明、「北海道式古墳と渡島蝦夷」古代文化、1985、7月号

註6. 蝦夷に対して食を饗し、禄を給することである。「日本思想大系律令」昭和51年

註7. 佐伯有清、「平城宮跡からも『夫』字銘土器」、北海道新聞、昭和60年7月27日付夕刊

註8. 回転糸切りで底部および周縁に回転ヘラケズリのある赤褐色土器は、払田柵跡で嘉祥2年（849年）の紀年名のある本筒と併出していることから9世紀中半頃の年代が考えられている。再調整が施されないものは技法的に新しいものと思われる。

秋田県教育委員会「払田柵跡」、昭和49～59年

註9. 青森県教育委員会「三内遺跡」青森県埋蔵文化財報告書第37集、昭和53年3月

註10. 仙北町史談会「うもれ木」第9号、昭和57年3月

註11. 青森県教育委員会「朝日山遺跡」、青森県埋蔵文化財調査報告書第87集

### 註以外の参考文献

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年3月

伊東信雄、須藤隆：「瀬野遺跡—青森県下北部瀬野沢村瀬野遺跡の研究」東北考古学会、1982

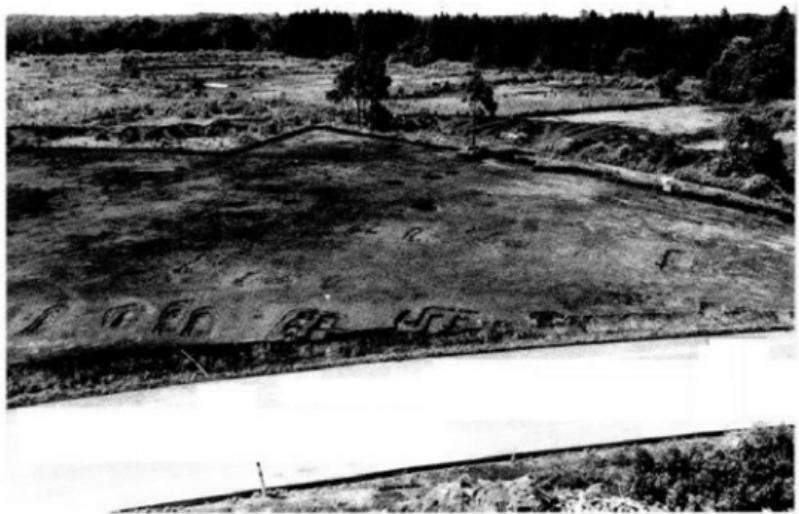
須藤隆：「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」考古学雑誌、1983



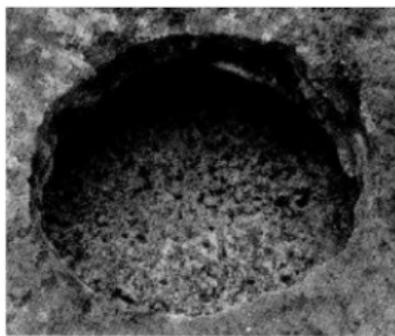
第17図 遺構配置図



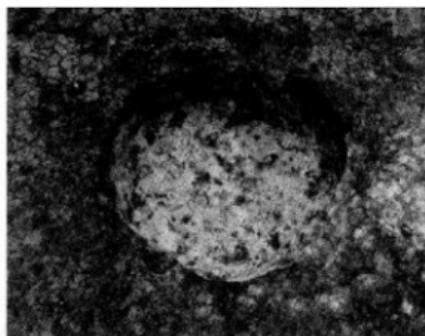
遺跡全景 (東→)



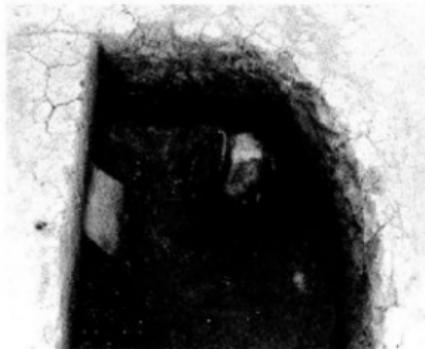
遺跡全景 (南→)  
図版 1



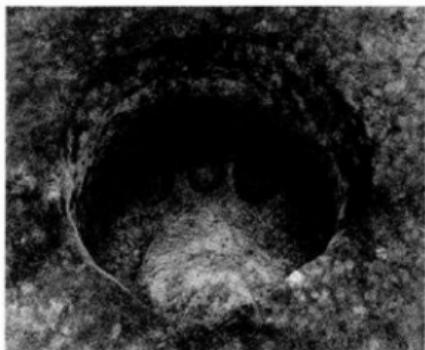
1号土坑



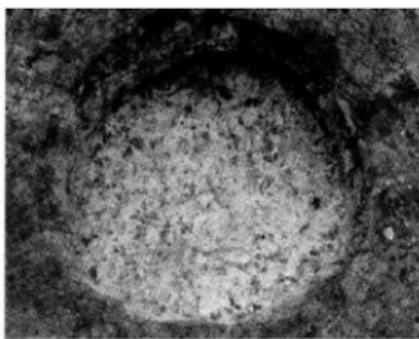
2号土坑



2号土坑出土状况



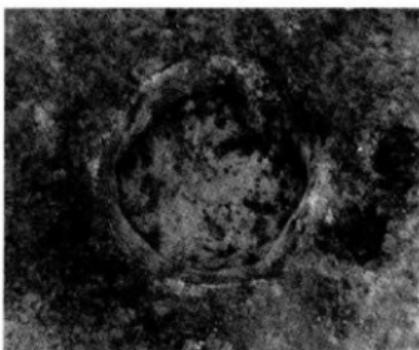
3号土坑



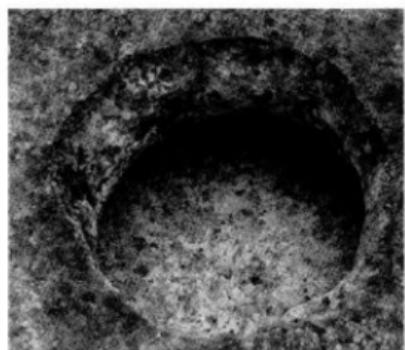
4号土坑



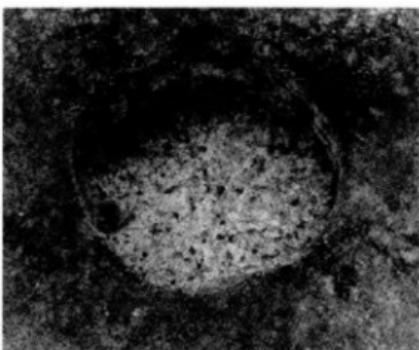
4号土坑遗物出土状况



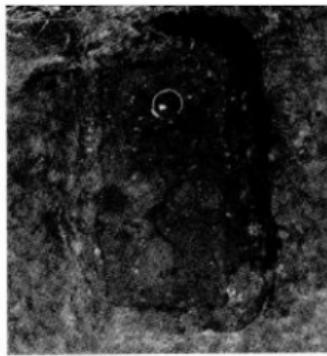
5号土坑



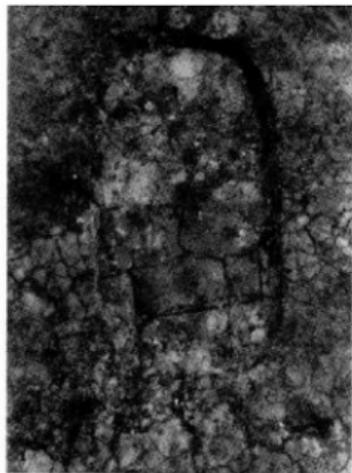
6号土坑



7号土坑



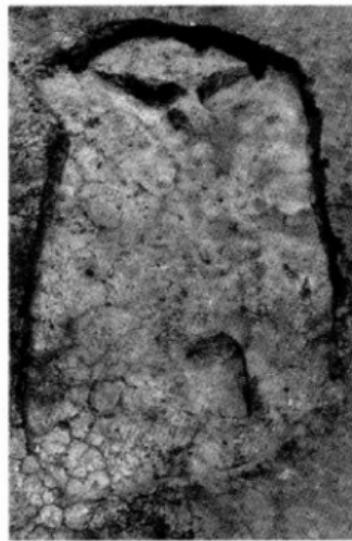
22号墓 (北→)



23号墓 (南→)



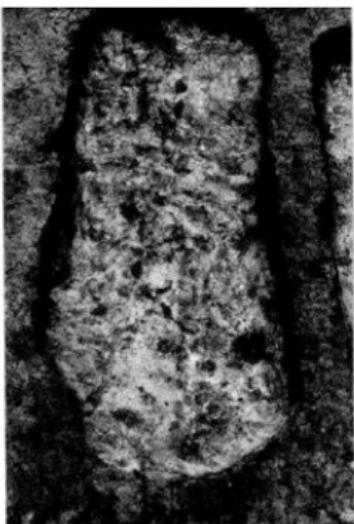
25号墓 (南→)



25号墓 (完掘) (南→)



26号墓 (北→)



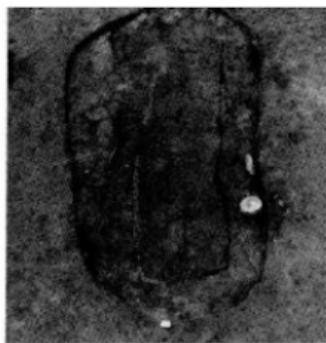
26号墓 (南掘) (北→)



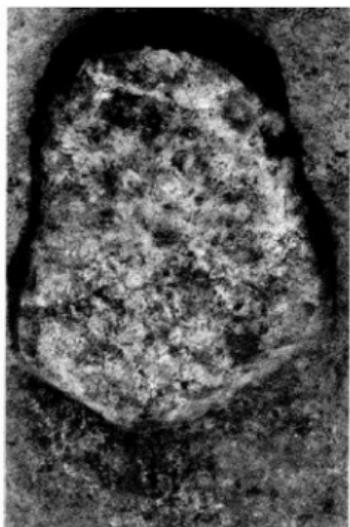
27号墓 (北→)



27号墓 (南掘) (北→)



28号墓 (南→)



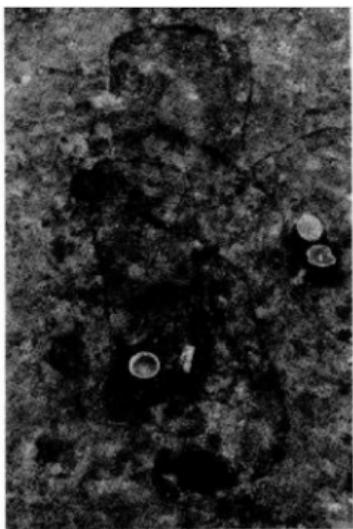
28号墓 (完掘) (北→)



29号墓 (南→)



29号墓 (完掘) (北→)



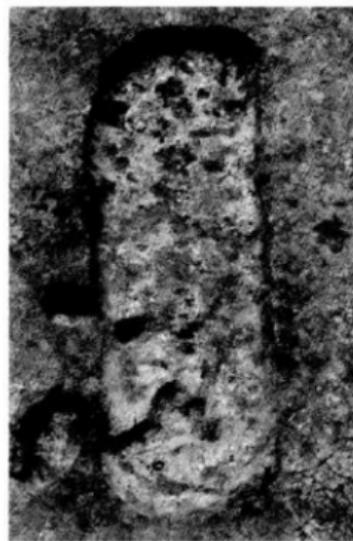
31号墓 (南→)



31号墓 (完掘) (北→)



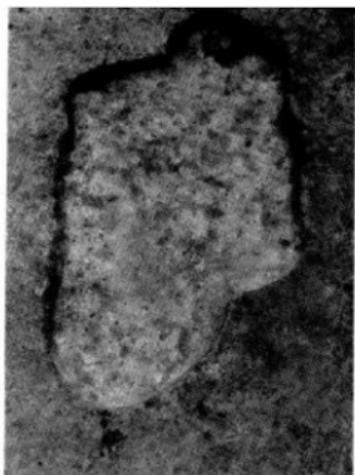
32号墓 (南→)



32号墓 (完掘) (北→)



33・35号墓 (南→)

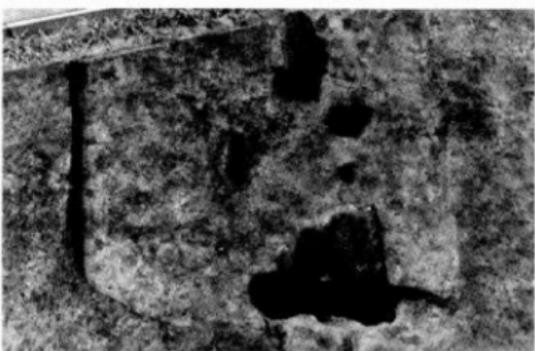


33・35号墓 (完掘) (南→)



左上 34号A・B墓 (南→)  
上 34号A墓検出人骨

34号A・B墓 (完掘) (北→)

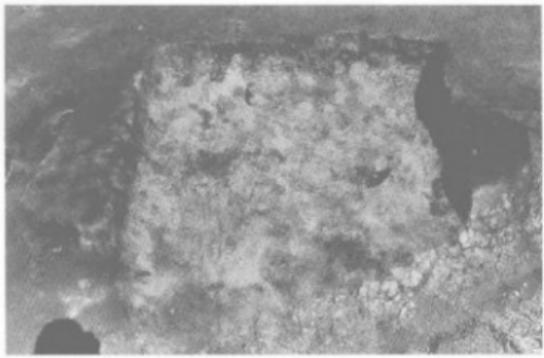




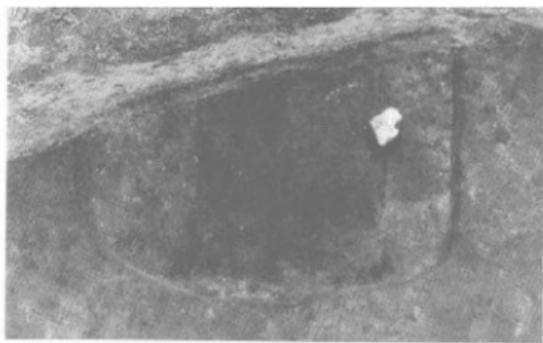
36号A・B墓 (南→)



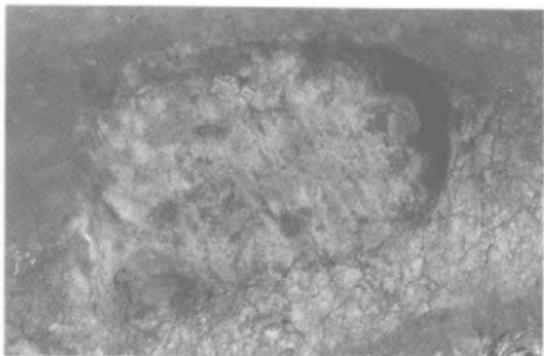
36号A墓出土 刃・石带



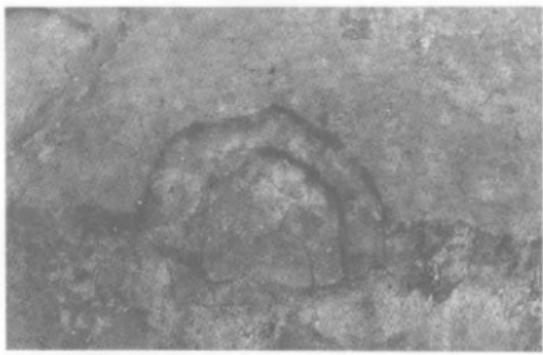
36号A・B墓 (完掘) (南→)



37号墓 (北→)



37号墓 (完掘) (南→)



38号墓 (南→)

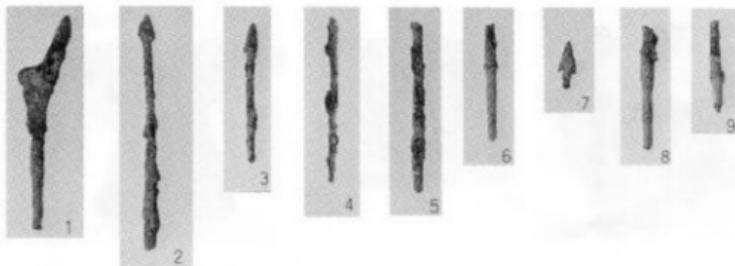


1  
2  
3~4  
2号土坛  
3号土坛  
4号土坛

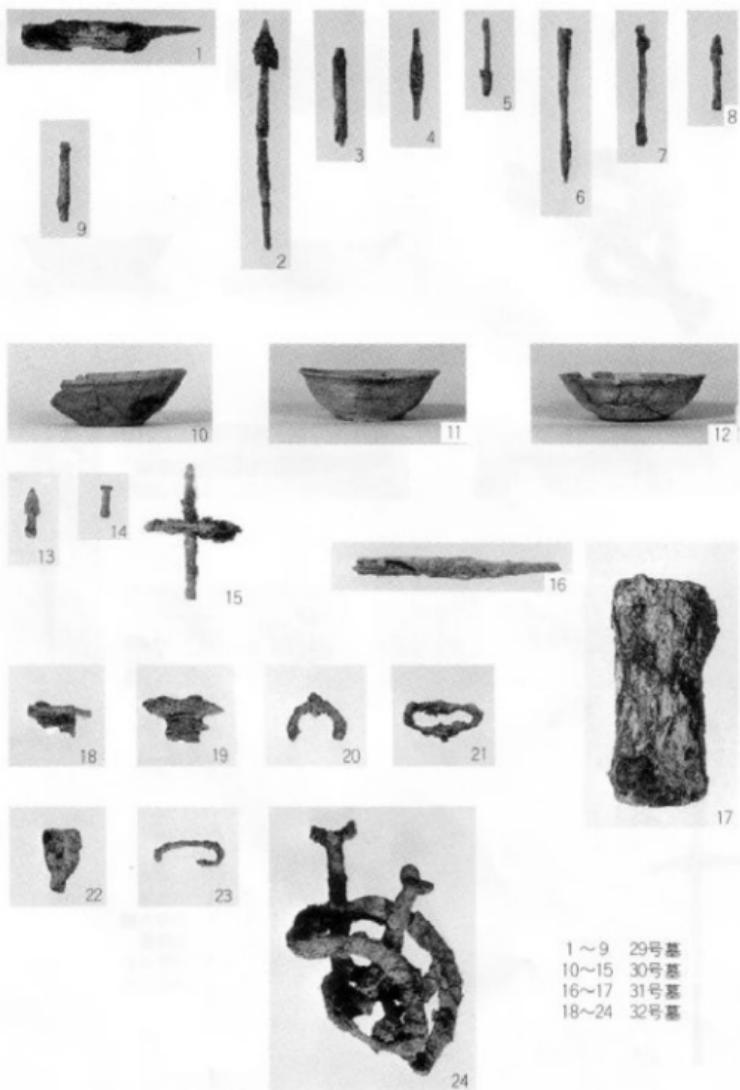


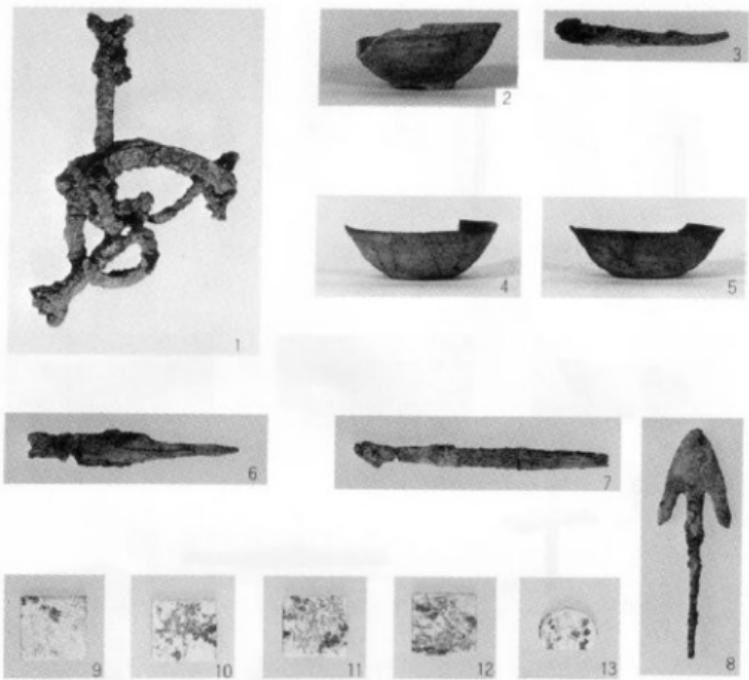
5~7 22号墓  
8~10 25号墓





1~9 25号墓  
10~12 26号墓  
13~15 27号墓  
16 28号墓

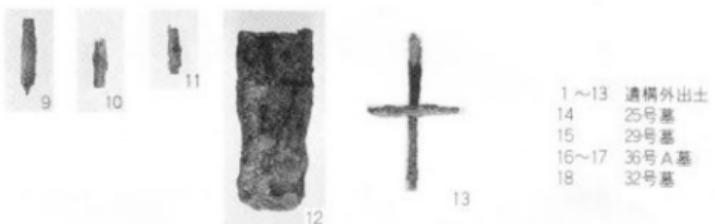
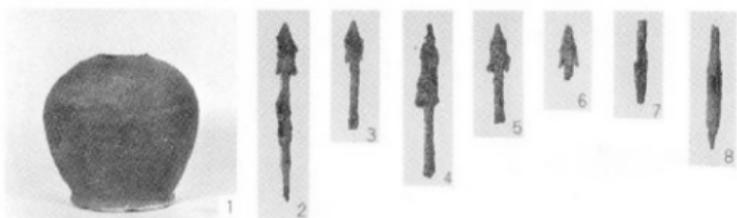




- 1 32号墓  
 2~3 33号墓  
 4~5 34号A墓  
 6 35号墓  
 7~13 36号A墓  
 14 36号B墓



图版14



## 秋田市四ツ小屋・湯ノ沢F遺跡出土人骨の鑑定書

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

教授 野坂洋一郎

助教授 伊藤一三

### 1. 序

標記遺跡より出土人骨1体について鑑定を行った。本人骨は頭部を北に向かって仰臥位で埋葬されていたが、顎面頭蓋が前面より圧迫され、押しつぶされた状態で出土した。そこで、骨を含んだ土を一塊として切りだし、表面をワックスで被覆した状態で保存し、現場から研究室へ移送した。土塊を除去して出土した骨は図1のごとく配列していた。下顎骨、鎖骨、上腕骨は比較的良好に保存されていたが、顎面頭蓋は小破片となり、骨質は脆く、破損が大きく、破断面は角が丸くなり断端を結合して復元することは困難であった。

### 2. 結果

発掘した骨のうち、部位の同定が可能な骨は表1に示すごとくであった。人体の全骨骼からすると出土した骨は非常に少なく、土圧などにより細骨片状になり、骨片の断面および表面は摩耗しており骨片となってから、時間的経過が長かったと思われる。そのため頭蓋冠の一部を除くと、復元は困難であった。しかし、頭蓋冠の縫合部が残存したので、縫合の施合の程度をR i b b eの分類にのっとり分類した。その結果、冠状縫合の矢状縫合との合流点における施合度は、外板で1~2度、内板で2~3度を示し、年齢は40歳~50歳と考えられる。矢状縫合は冠状縫合との合流点で外板、内板ともに2~3度を示し、頭頂部は外板



図1 出土人骨の位置関係

が1~2度、内板が2~3度であった。そこで年齢は40歳代と考えられる。

口蓋は破損により鼻腔側は完全に損失しているが、正中口蓋縫合の口蓋骨部後方1/3は表面にわずかではあるが縫合が残存しており、30~50歳と推定された。さらに右側上顎歯槽部における切歯縫合の癒合は50歳代程度の癒合度を示した。

以上の顔面頭蓋の縫合における癒合度を総合すると、40歳代と推定される。

性別を判定できる骨は殆んど出土しなく、判定は困難であるが、頭蓋冠の厚さが比較的厚く、上腕骨の骨体部で中央最小径が17.75mm、現代日本人（関東人）の平均値は男性で17.74mm、女性で14.70mmと大きな差が認められる。本個体の場合は男性の平均値と略同値を示したことより男性個体と類推された。さらに、下頸骨における筋肉の付着部であるオトガイ隆起の突出が強く、男性と考えられるが、決定できる強い要素には欠けている。

下肢骨が出土しないため、身長の推定は出来ない。

部位	骨名	左側：右側	備考
計測項目のうちより計測可能な部位について	頭蓋冠	○ ○	前頭縫を含む左側半分の一部と冠状縫合を含む前頭骨の正中より右側部分
計測すると、前下頸幅：47.5mm、下頸体高のオトガイ孔部：31.0mm、第二大臼歯部24.0mm、下頸体厚のオトガイ孔部12.0mm、第二大臼歯部13.5mmであった。	頭頂骨	○ ○	左側：矢状縫合と冠状縫合を含む前頭角部 右側：矢状縫合を含む一部
この計測値のうち左側第二大臼歯部の下頸体高と下頸体厚が平均より2~3mm小さな値を示し、それ以外の値は平均値とはほぼ同様であった。歯牙の所見の詳細は表2に示したが歯牙と頸骨を関連付けて観察すると、左側第二大臼歯部においては歯槽は完全に閉鎖し、歯牙	顎面骨	○ ○	左右側とも前頬突起で前頭顎骨縫合を含む部分
	上顎骨	○ ○	左側：155の歯槽突起を含み口蓋突起を含む部分 右側：654321歯槽突起と口蓋突起
	口蓋骨	○ ○	左右側が正中で縫合している水平板の一部
	下顎骨	○	左右側の筋突起と下頸体
上肢骨	頸骨	○	頸骨体のみで肩峰端と胸骨端は欠損している
	上腕骨	○	上腕骨体の中央1/3のみ

表1 出土人骨一覧表

表2 歯牙所見 湯ノ沢F遺跡出土人骨の歯牙計測値（番号：G17II：SK34A）性別：♂

右								左							
上		下		上		下		上		下		上		下	
6.8	6.6	7.22	7.99	10.09	9.39	10.77		10.77	9.39	10.09	7.99	7.22	6.6	6.8	
11.4	11.3	9.08	9.34	8.24	6.42	7.01		7.01	6.42	8.24	9.34	9.08	11.3	11.4	
10.0	10.6	6.86	7.30	7.85	6.97	8.33		8.33	6.97	7.85	7.30	6.86	10.6	10.0	
▲	▲	×	□	□	□	□		▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
8	7	6	5	4	3	2		1		2	3	4	5	6	7
▲	0	□	□	□	○	○		□	□	□	□	□	×	×	▲
11.1	11.6	7.17	7.00	6.92	5.93	5.33		5.33	5.93	6.92	7.00	7.17	11.6	11.1	
10.5	10.7	8.35	7.77	7.84	6.09	5.64		5.64	6.09	7.84	7.77	8.35	10.7	10.5	
6.6	6.9	7.26	8.15	10.29	8.64	8.38		8.38	8.64	10.29	8.15	7.26	6.6	6.6	
C <sub>4</sub> 残根	C <sub>4</sub>														
達心根のみ				歯根のみ	歯根のみ										

◎：歯骨に歯牙が植立している。

○：歯牙のみ存在する。（歯骨が死後破損し、歯槽部が欠損したもの）

▲：歯牙および歯槽ともに認められないもの。（標本が破損しているため確認ができない）

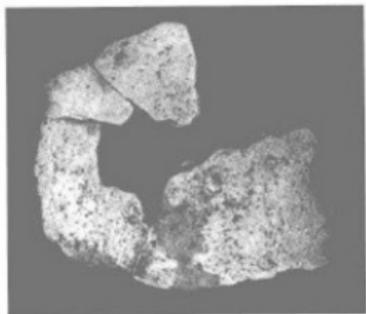
×：X線的に歯牙および歯槽が存在しないもの。

□：歯槽のみ認められるもの。

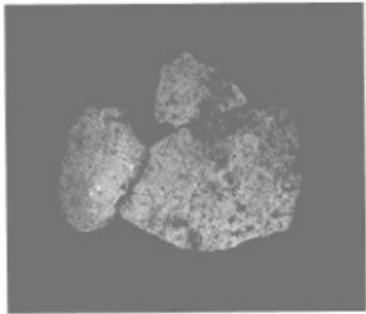
が喪失してから、そういう長い年月を経ていると考えられる。右側下顎大臼歯は第一、第二大臼歯ともに齶触のため歯冠が崩壊して遠心根のみが歯槽内に、残根状態で留まっていた。上顎においては、左側第一大臼歯が齶触により喪失している。歯牙の保存状態は悪く、歯冠部は残存せず、わずかにエナメル質の破片が1個認められた、大部分の歯根は歯槽内に残存して出土した。このような歯根の状態からすると、明らかに齶触により崩壊して残根状態を示した大臼歯以外にも、口腔内には齶触が多かったのが頬椎される。さらに、左側下顎大臼歯部のように喪失後、時間経過が長く歯槽が完全に閉鎖していることからすると、年齢は少なくとも40歳代と考えられる。

### まとめ

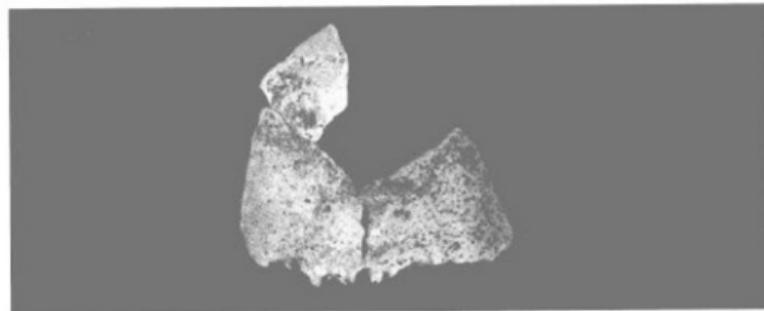
秋田市四ツ小屋・湯ノ沢F遺跡（G17II：SK34A）より出土した人骨につき鑑定した結果40～50歳の男性の個体であった。保存されていた骨格が少ないため、身長、死因等は不明であった。



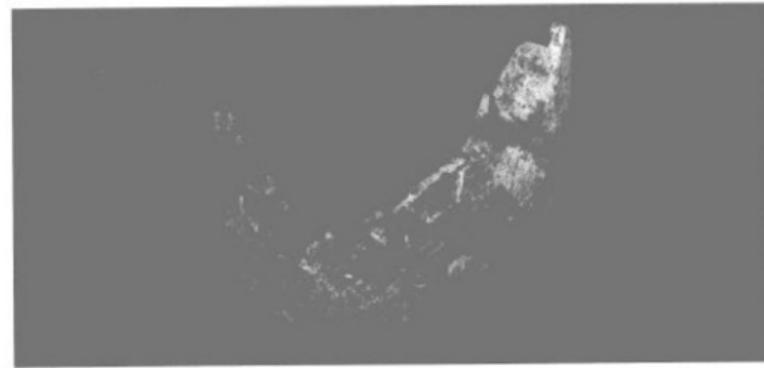
頭頂骨 前頭角



前頭骨

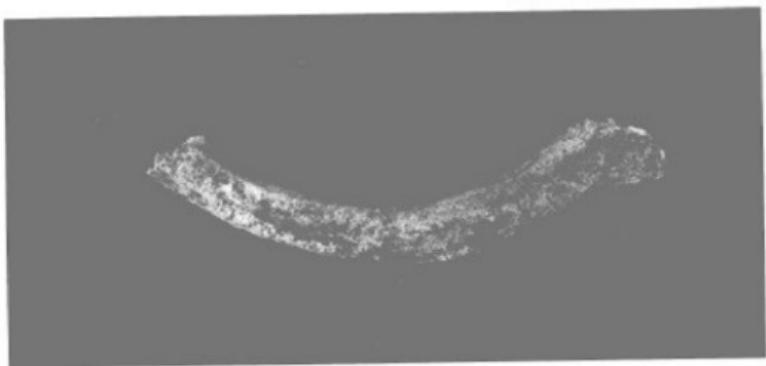


頭頂骨 右側

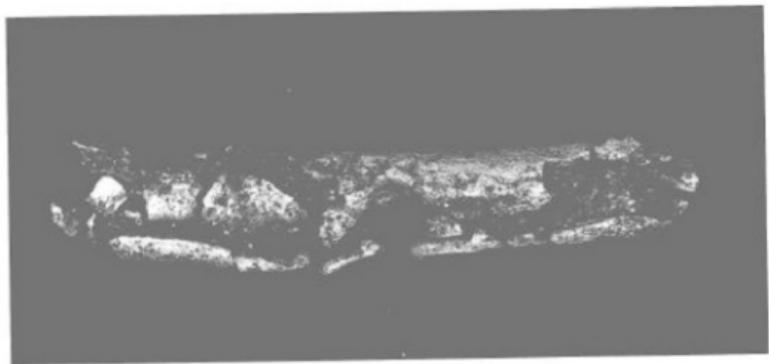


下頸骨

圖版 1



鎖 骨



上腕骨 左側

(実寸大)

## 湯ノ沢 F 遺跡試料 材同定報告

パリク・サーヴェイ株式会社

### 1. 試料

試料は1点で、平安時代のものとされる土壤から出土した棺材とされる炭化材である。

### 2. 方法

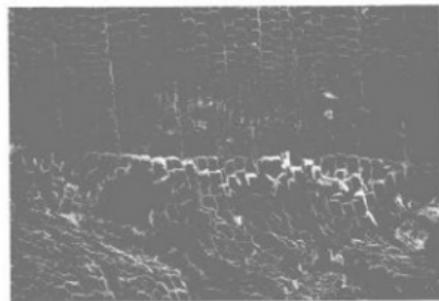
試料は多量の土壤とともに送付されたため、これに水を加えて放置し、材と土壤を分離した。水に浮いてきた試料を十分乾燥させたのち、木口・柵目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1）も作成した。

### 3. 結果

試料はスギ (*Cryptomeria japonica*)と同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的性質は、次のようなものである。

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ樹脂道はない。放射仮道管ではなく、分野壁孔はスギ型 (*Taxodoid*) で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

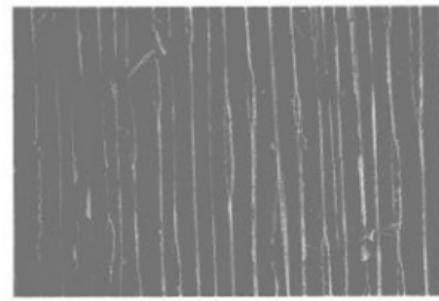
スギは、本州・四国・九州に自生するスギ科の常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要な樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。



木口  
×70



糸目  
×140



板目  
×140

---

秋田市  
秋田新都市開発整備事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
昭和61年3月

発行 秋田市教育委員会  
印刷 株式会社三戸印刷所

---